我が家は魔王一家

音緋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が家は魔王一家

【Ｎコード】

Ｎ４３１６Ｏ

【作者名】

音緋

【あらすじ】

ほんの三年前まで魔界には魔王が存在し、民の命もなんとも思わない残虐な政治が執り行われていた。しかしそれは三年前の話。大臣や民衆にクーデターを起こされ、魔王一家共々魔界から科学の世界・現界へ追放されてしまう。そして今、彼らは小さなアパート暮らしをしている。

わがままで自分勝手で無職の父（元魔王様）、献身的で皆に優しいかと思えば金銭のことになれば豹変する母（元魔王妃）、ヒーロー特撮で魔王の行く末を研究している天才少年の弟（元魔王子）。

そして主人公で一番の常識人でツッコミ役の姉（元魔王女）。四人はとりあえず「普通の家族の生活」を営んでいた。

しかしその生活を破壊しに現れたのは、本来魔王を倒す役目をもつ、勇者四人衆だった。

※　第二章（魔界編）完結済です。第三章スタートしました！

第一話　父さんの就職活動（前書き）

初めて投稿させてもらいます。よろしくお願いします。
最初に申し上げますが、今回はファンタジー要素が出てきません。
タグがファンタジーなのにすいません。
この話はファンタジーではありますが、同じぐらい学園もので、
また同じぐらい家族ものなんです。

第一話　父さんの就職活動

♪　紺の空に　浮かぶのは
正義の星　スタートリガー！
優しい心の　持ち主で
でもでも趣味は　万引き～！

本当は　本当は　弱虫だけれど
信じてる者のため　スーツを纏う～！

（スター☆チェンジ！）

行くんだ！　スターショット！
やるんだ！　ブレイブトリガー！
そしてとどめの～　一撃必殺・ブレイブスターキック！

待ってろ魔王　そのうちお前を狙い撃ち！

（ショット！）　♪

＊

稲妻家の朝は、この歌で始まるといっても過言ではない。実際、稲妻家の長女である萌黄も、リビングから聞こえてくるこの「正義の星　スタートリガーのテーマ」が目覚まし代わりだ。スタートリガーのエンディングのころだから、時計の針が七時半を差しているのは間違いない。

目を開くや否やぐいと身体を起こす。今日は水曜日だから体育があるな。枕元に放られていた体操着を手にし、萌黄は六畳の寝室からリビングに出た。

と、一番に声を掛けてくるのは相変わらず、稲妻家長男の紫苑(しおん)だった。

「なあなあ萌黄」

「うっさいわね、スタートリガーの話なら勘弁してよ」

「いや、今日のは本当にツッコミどころが多かったんだって。今日の魔王の手先ってのがさ、暴れん坊ヴォスっていう強そうな奴だったんだ。今回こそは本気で期待しちゃうほどの見た目だったんだよ、推定三メートルの巨漢だし。でもそいつ異常にスピードが遅いんだよ。五十メートルを一分かけて走ってる感じで、距離を離して戦うスタートリガーに射撃されまくってさ、もう見てられなかった。やっと攻撃できてスタートリガーがピンチになったと思ったら、追い討ちかければ勝てるってのにボーっと見てるだけなんだよ。馬鹿だと思わない？　んで復活したスタートリガーにやられてお終い、一件落着。考えられないほど間抜けだよね。最低俺が魔王だったらあんな馬鹿最初っから雇わないけど」

「はいはい」

中学生とは思えぬこの饒舌。将来には政治家とか弁護士とか、語る職業が向いていると萌黄も本人も感じているほどだ。萌黄とは違って、紫苑は通っている中学校で学年トップの学力も誇っているし、先生からは全国有数の秀才高校の奨学生になれると念まで押されている。そんな彼が興味と関心を持って毎日研究しているのがこのヒーロー特撮だ。特に、魔王の手下の敗北原因をあれこれ調べている。萌黄からすれば、せっかくの才能を捨てているようなものにしか見えないのに、本人は真面目に研究しているから言葉も出ない。

話に付き合っていると遅刻になりかねない。大雑把に聞き流して、自分の準備に取り掛かるのが一番だ。わかっている萌黄はテーブルの上に置かれたトーストを手にとり、それをかぶりつつ紺に紅白の

ラインが入ったセーラー服に着替え始めた。
「萌黄、起きてきたのならちゃんと挨拶なさい」
稲妻家の母である棗(なつめ)はキッチンで弁当作りに勤しんでいるようだった。今日は珍しく四つの弁当箱にご飯、卵焼き、お浸しと詰め込まれている。
「あ、ごめん、おはよ」
「父さんにも言ってあげなさい」
「あれ、父さんもう起きてたんだ」
洗面台を覗くと、稲妻家の主である鬼灯(ほおずき)が全く似合っていないスーツ姿で鏡に向かっていた。実に珍しく険しい面つきで鏡に映っている自分と向かい合って、ネクタイを何度も直している。こうやって背筋を伸ばして真面目な行動をしていれば、間違いなくもてるだろうし、もしかしたらモデルにスカウトされそうな絶妙な存在感がある。
「父さん……おはよ」
声を掛けるなり、鬼灯は鏡越しに口元を緩めた。
「ああ、起きたのか萌黄」
「うん、まあね。それよりも父さんはりきってるね。今日の面接頑張って」
「まあ適当にな」
「もう父さんってば口も態度も悪すぎるのよ。大人しく言うこと聞いてれば三百三回も就職活動しなくてもとっくに就職できてると思うんだけど」
実際、鬼灯が働いたというのは一度もなかった。いや職についていなかったわけではないが、誰かの下について働くというのが未経験だったのだ。しかも幼いころから甘やかされて育ったという経験もあってか、性格はわがままで自分勝手。自分の気に食わないことがあればすぐに放り出す。結局、稲妻家の家計を支えているのは献身的な母・棗の収入だけだ。
「面接官が悪いんだ。私に命令をするなど千年早い。しかも敬語を

使えだのなんだの、訳がわからんな」
　これが盗聴されでもしていたら間違いなく一発で不合格である。
「今回こそちゃんとしなきゃダメだよ。千歩でも千年でも面接官に譲ってあげればいいじゃない」
「それはいかん。最初を甘やかすとどうなると思う？　それから調子に乗ってこちらが譲ってやったことなど綺麗さっぱり忘れてしまうのだ。ここは心を鬼にしなくてはならんだろ」
「だめだ、話になんない」
　何をどう言っても自分が上でなければ納得できないのだ。この人が職につけるのって自分自身が会社を設立するしか方法はないんじゃないだろうか。とはいえ稲妻家には雀の涙ほどの貯金しか残っていないので結局何もできないのだが。
　トーストを食べ終え、洗面台の端のほうで歯を磨き終えたときにはすでに八時のワイドショーが始まっている時間だった。
「萌黄、早く学校に行かなきゃ。遅刻なんか許せないんだけど？」
　玄関から、紫苑の急かす声が聞こえる。そこまで言うのなら先に行けばいいのに、なぜだか彼はいつも待っているだけだ。だから萌黄は余計に焦らされてしまい、それが原因で忘れ物が多くなっているのだ。しかしゆっくりしているわけにもいかない。急ぎ足で学校指定の鞄を肩に下げ、玄関に辿り着く。時計によると八時五分だ。
「じゃあ行ってきます！」

＊

　萌黄と紫苑は同じ白樹園中学の三年と二年である。萌黄の在籍する三年クラスは二年クラスの真上、四階に位置する。息を切らして階段を上りラストスパートをかける。だが八時半ちょうどのチャイムを、萌黄は二年クラスがある三階で聞いてしまった。

「じゃ、後はがんばれ」
チャイムが鳴る最中、紫苑はすれすれで教室に飛び込んでいった。彼は何とか遅刻にならないだろう。しかし問題は萌黄だ。体力を酷使した今の状態でさらにもう一階分階段を上ることは絶望的だった。しかもチャイムが鳴り終わるまでに教室に辿り着くなど無謀にも程がある。とはいえここまで来た以上上らないわけにはいかない。身体にむちを入れ、もう火事場の馬鹿力で上るしかないのだ。
「あー、もう、最悪だわあ……」
ぼやきつつ教室に足を踏み入れた萌黄だったが、まだ天は見捨てていなかった。
担任の先生は、まだ教室にいなかった。つまり出席をまだ取っていないらしい。
「よかったね、萌ちゃん。まだ先生来てないよ」
窓際最後部の席に着くなり、前の席の眼鏡少女リッちゃんが振り返ってきた。
「そうなんだ。でもリッちゃん、なんでまだティーチャー来てないの？」
「噂によると、転校生が来るらしいよ。しかもジュニーズアイドルのＭｉ－Ｈａ（ミーハー）似なんだって。その噂正しいのか間違ってるのかは知らないけど、火のないところに煙は立たないって感じで、もう三年生中が沸き立ってるの」
「ふうん。この学校の男子ってイケてないもんね。いたとしても三組の松陵圭（しょうりょう）太ぐらいでしょ？　そりゃあ転校生で沸き立つのも無理ないわよね」
そんなに噂になるほどの男ってどんな奴だろう。萌黄はその顔を拝むべく、今か今かと廊下側をじっと見ていた。
そのとき、ティーチャーこと茶々（ささ）先生に隠されるように、噂の彼は廊下を通り過ぎて、三年一組の教室に入ってきた。と同時に一組の女子の黄色い声が上がる。またそれだけではなく二組や三組の物好きの女子がいつのまにか一組に紛れ込んでいて、一緒になって黄

色い声を上げている。その声にはさすがに圧倒されたのか例の彼は目を見開いたまま、茶々先生に何かを訴えようとしている。一方の中年メタボの茶々先生は自分が声援を浴びていると思い込んでいるのか、顔を赤らめつつ咳払いを一つし教室を静めた。

「では今日からこのクラスの一員となる彼を紹介しよう。千臣(せんしん)篤志君だ。千臣君も一言何か言ってくれ」

千臣という例の彼はよくわからないままとりあえず頷いて、改めてクラスの皆に向いた。

「んーと、初めまして千臣です。これからお願いします……こんなのでいいっすか」

初めて聞いた千臣の淡々とした声に、女子の鼓動はヒートアップし、歓声はもはや悲鳴に似た感じになって、興味のない者の鼓膜をギンギンに奮い立てる。

漆黒の髪は柔らかいくせっ毛だが寝癖のようには見えず、お洒落なヘアスタイルにも見えないことはない。学ランは着崩しているのに校則違反に触れているようにも見えない。やる気も生気もなさそうな瞳なのに、それが女子心を煽っているのもわからないわけではないのだ。

「まあ、合格ってとこね」

「え、萌ちゃんあの人のこと好きになっちゃったの？」

「そんなわけないでしょ。あたしああいうハッキリしないタイプ好きじゃないの。ただ単に女子の気を引く要素を持ち合わせてる点で合格なだけ」

「こういう人、萌ちゃんらしくないもんね。謎めいた雰囲気してるし、あの人」

「うん、それになんか嫌な感じがするのよね……」

警戒するあまり睨みつけてしまった萌黄と皆から注目を集める千臣。刹那二人の目が合った。萌黄は不意に目を逸らし、リッちゃんとの噂話に耳を傾ける。しかし千臣は今まで見せなかった微笑を浮かべ、教壇を後にした。

第一話　父さんの就職活動（後書き）

と、こんな感じです。
全くファンタジーではないですね。
ですが次からは、展開していく予定です。
次は……いつになるかわかりませんが、気長にお付き合いいただけると光栄です。

第二話　ツインテールの恋心（前書き）

思ったよりも時間があったので今回は早い更新となりました。
でも、まだファンタジーに入れてません……

第二話　ツインテールの恋心

今日の授業でまともに集中できた授業といえば、男女別の授業である体育のみだった。他の授業――例えば一時間目の数学では、わからないところがあるとか適当な理由をつけて千臣に近寄るもの多数。しかもその女子同士がポジションの取り合いを始め、仕舞いには所々で喧嘩をする始末。教師は教師で気にもせず勝手に授業を継続するものだから、萌黄はただノートに板書を写すしかできなかった。ただ、唯一幸運だったのは千臣が廊下側の席で、萌黄の席とはかなり遠かったことだ。そのおかげで席の移動まではせずに済んだ。

ホームルームが終わるなり脱兎のごとく教室から脱出した萌黄たちだったが、放課後三年一組の教室がどうなっているかは、想像するだけで寒気が走る。

「あ、あたしここで紫苑待たなきゃ行けないから」

「じゃあまた明日、萌ちゃん」

白樹園中学校門の前でリッちゃんと別れ、萌黄は門番のようにその場で腕を組んだ。

珍しいことだったのだ。大抵なら紫苑のほうが先にこの場に立っていて、何分何秒待ったとか恩着せがましく言うのに。超特急であのハーレム教室を抜け出したからだろうか。厚い曇り空を仰ぎながら、この珍しい状況の理由を考え直す。

そう言えば父さんの就職はうまくいったのだろうか。

――無理だろうなあ。奇跡的にうまくいったとしても、職場に入った日のうちに解雇だろうなあ。

「ごめん、萌黄、遅れた！」

首を下ろすと、息を切らした紫苑が頭を下げていた。

「そんな焦らなくてもいいじゃない、落ち着きなさいよ」

「い、いや、落ち着けないってこの状況！　逃げるので精一杯なん

だから……じゃあ萌黄、先に帰ってるから！」
　ものも言わせず紫苑は全速力で帰路を辿っていった。
　止めることさえもできずに、萌黄はただ一人校門の前に立ち尽くしていた。わざわざ待ってやったのにという怒りと「逃げている」という不可解な言葉が頭の中を渦巻いている。今すぐ紫苑を追いかけたいが、何から逃げているのか知るためにこの場で待ち伏せもしたい。結局勝ったのは待ち伏せで、校内を覗き込んだ。
　と、ツインテールが萌黄の前で立ち止まった。セーラー服からして同じ中学の生徒らしい。
「稲妻紫苑さま～～～～っ！」
　獲物を求める獣のごとく、現れた少女は咆哮を繰り返しだした。この小学生のような姿からは裏腹に、千臣を囲い込む女子顔負けの叫び声を何度も何度も発している。脇を通り抜けていく生徒たちも見てみぬふりをして通り過ぎていく。それでも彼らの視線を感じないのか、彼女は黙ろうとはしない。
　弟の名を叫び続けられて無視できる姉ではない萌黄は彼女の肩を鷲づかみにし、黙らない口を押さえつけた。
「黙りなさい」
　一喝したというのに少女は萌黄の手をすり抜けて、再び叫びに入ろうとする。
「紫苑さ……」
「これ以上紫苑のプライベートを傷つけるなら、あたしが許さないわよ」
　さらに一喝すると、少女は眼力を効かせて睨みに入ってきた。まるで敵を見つけた獣のように、鋭い目つきをしている。
「何よ、あなた、紫苑さまのなんなのよ！」
「姉よ、あんたこそ紫苑のなんなのよ！」
　額を突き出す少女に、顎を突き出して抵抗してみる。これでおとなしくならないなら素直に校内に戻って彼女を捕まえてもらう予定だった。しかし予定に反して彼女は空気が抜けたみたいにへなへな

とアスファルトの上に膝をついた。そしてそのまま正座して、突き出していた額を地面にこすり付けだしてしまった。
「申し訳ありませんでした、お姉さま！」
「……は？」
「まさかお姉さまとは露知らず……お姉さまを怒らせてしまうなんて、本当に、本当に申し訳ありません！」
「だから、あんたは紫苑のなんなのよ」
「あっ、申し遅れました、私は金馬嬢子（かねうまじょうこ）と申します。紫苑さまの同級生で、あの……申しにくいのですが、恋人です」
こいびとです。コイビトデス。恋人です。
嬢子の高い声がぐいぐいと心の奥底に入り込んで、それが反響しているようだった。
紫苑に恋人ができたというのは、話にすら聞いたことはなかった。むしろ恋愛なんてまだ考えられる年頃ではないと思っていたのだ。それなのに、目の前の少女は顔を赤らめて、円らな眼差しを向けて萌黄の言葉を待っている。返事を期待しているような様子だった。姉からよい返事が得られることすなわち、恋人家族に認められることとでも思っているのだろうか。いや、そう思っているからこそそんな瞳を向けるのだ。
「恋人、ねえ」
「はい。お願いします……」
「本当に恋人なら、なんで紫苑は逃げていったのかしらね」
「彼、一緒に手をつないで帰ろうって言ったら照れちゃったんです」
「ふうん……」
紫苑が逃げ去っていった方向を二人で眺めていたが、萌黄はもうこの少女に付き合うことすら面倒になっていた。しかも他の何も知らない生徒からの視線が萌黄にまで向かっているし、その一部からは萌黄がいたいけな少女を正座させていじめているとまで思われているらしいし、その勘違いもされたくない。
「もういいわ。好きにしなさいよ。その代わり、さっきみたいに紫

苑を追い立てるのはやめてやってちょうだい」
「は、はい！　ありがとうございます！」
その返事と待ってましたと言わんばかりに、少女は許可なく立ち上がって、紫苑が去っていった街道を辿るように走り出していった。まるで、オスの匂いに反応するメスの蝶のようにひらりひらりと曲がり角を曲がっていき、そこからの行方はもう見えなくなってしまった。
嬢子とか言う少女のことははっきり言って百パーセント好きになれそうになかった。これが昼ドラにありがちな、嫁に反発する姑の心の内なのかな。
「すいません、嬢子にからまれてましたよね……」
ようやく帰宅への一歩を踏み出そうとした萌黄の背後にすっと深い影が差した。振り返らなくてもなぜか相手が誰なのか、直感的にわかった。だから振り返って千臣が立っていたとしても、それほど驚きはしなかったのだ。

第二話　ツインテールの恋心（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
二度も裏切っちゃってすいません……
次回の投稿もいつになるかわかりませんが、気長にお付き合いください。

第三話　戦士一族の襲来（前書き）

一日空いて、第三話となりました。
今まで問題となっておりました件、ようやく解決でしょうか。

第三話　戦士一族の襲来

「あなた転校生の千臣君よね？　よくあの教室から抜け出せたものね」
「んー、あの娘たちなら喧嘩に夢中になっちゃって……抜け出してもばれなかった」
　飄々とした感情もこもっていない声で言う千臣は今もなお骨肉の争いが繰り広げられているであろう校舎をぼんやり眺めている。転校当日にあんな仕打ちを受けておいて激昂もせず、こんなに冷めた表情ができるのだから、精神的な強さは間違いなくあろう。彼なら不毛の砂漠に一人取り残されても、生きていけそうな雰囲気がある。
「それよりも、さっきの女の子とは知り合いなの？」
　見た目は少女、中身と習性は獣。思い出すなり段々腹の虫が暴れだしてくる。今にも噴出しそうな混沌とした萌黄の心の内と相対して、千臣は肯定も否定もなく曖昧に唸るだけだ。
「そうだな……知り合いって言われたら知り合いだな。でも初めて会ったのは一週間前だし、彼女のこともよくわかってないけど……しいて言うなら、仲間とか」
「仲間？」
「うん、まあそんなところかもな。同じ目的を持って、同じ学校に通ってる仲間」
「同じ目的って……？」
　呟いた萌黄の声は消された。と思えば背中に激痛が走る。身体を門に打ち付けられたと理解したときには、十センチほどの距離に彼の暗い瞳があった。両手首をがっしりと捕らえられ、その瞳に圧倒され、涙どころか悲鳴さえも止められてしまう。
　彼の息が、萌黄の耳元で荒れわたっている。
「――魔王はどこにいる」
　間違いなく彼は、かつてない低い声で呟いた。

「答えろ」
「魔王？　あなたどこかで頭打ったりしたの？　それとも漫画の読みすぎ？」
嘲笑って切り抜けようとしても、彼は微動だにしない。それどころかさらに距離を詰めてくる。こんな状況を他人が見れば、彼はすぐ取り押さえられるだろうと思ったが、他の生徒たちはどこかのカップルが熱い愛を交し合っているとしか思っていないらしい。それをわかっていて千臣はこれほど無表情でいられるのだろう。
「稲妻萌黄、お前が魔王女だってことはわかりきっている。下らない言い訳はやめたほうがいい、身のためだ」
「うるさいわね、そんなもの知らないって言ってるでしょ。手離してちょうだい」
「だからごまかすなって言ってるだろ。それに、お前の魔術を使えばこの状態から抜け出すのも容易いはずだ……なんで使おうとしない？」
「本当にいかれてるのね。わかったわ、千歩……いや千年譲りましょう。千年譲ってあたしが魔王女とかだとして、じゃああんたは一体何なのよ？」
侮蔑しているはずなのに、唇が震えてくる。冷や汗が頬を伝っている。
「勇者四人衆の――戦士一族といえばわかるか？」
千臣は初めてはっきりとした声でそう告げた。溢れ出しそうな心臓の鼓動が恐れを抱かせる。
「知っているよなあ……お前たち魔王一家を魔界から追放した一族のひとつだからなあ」
「何を言っているの？　魔王といい勇者といい、自分が戦士ですって？　そんなに演技力があるなら演劇部に入りなさい。あたしの友達に部長がいるわ。よかったら紹介してあげるけど」
「まだ意地を張るか、その意地は認めてもいいけどな。口を割らないようなら力ずくで……」

手首に加えられている圧力が刹那強くなった。屈するわけにはいかない。萌黄は瞳で威嚇していたが、急に彼の握る手が緩んだ。千臣の顔も遠ざかり、代わりに誰かの声が反響し始めた。その声は輪唱と化して、輪唱は大きなざわめきとなっていく。

「……ぅーーん、千臣君どこーーー？」

三年一組・二組・三組女子連合軍のざわめきだった。ようやく彼女らを虜にしている千臣がいなくなっていることに気づいたらしい。彼女たちは自分が先に探し出してみせると言いたげに、校内のあちこちを探し回っているようだ。校門の近くでも数人の女子生徒の声が聞こえてくる。

「お呼びらしいわよ、人気者の千臣君？」

「他の人間に見つかるわけにはいかないか……」

大人しく千臣は萌黄を解放し、そのまま何も言わずに中学から離れていった。去っている彼の背中からは怒りと焦り、そして憎しみが零れているようだった。

彼は間違いなく戦士一族だった。

＊

家に帰ってきたときにはもう夕暮れ時で、傾いたアパートの屋根も紅に染まっていた。今日会ったことはすぐに家族皆に話さなければならない。まずはどこから話すべきなのか、思考を巡らせながら萌黄は玄関のドアをくぐった。ドアの鍵は開いていた。

「ただいま」

萌黄は目を見開き、息を呑むしかなかった。

リビングは戦場と化していた。テーブルがちゃぶ台を返したように横たわっているかと思えば、敷かれていた絨毯は無残にも切り刻まれて所々で綿埃を散らしている。フローリングの上にはひっくり

返された筑前煮が死体のように撒き散らされていて、その中心に突き刺さっていたのは禍々しく刀身が輝く包丁だった。
「おかえり萌黄……」
足の踏み場もない空間で、紫苑は割られた窓ガラスの片づけを細々としていた。
「何があったの、これ！？」
脳裏をよぎったのは例の戦士一族の虚ろな後姿だった。襲撃を受けたのかと必死に紫苑の肩を揺さぶる萌黄だったが、彼はくたびれたような顔で長いため息をつくだけだった。
「父さんがまた面接で落ちたんだよ」
「……それで物に八つ当たりしてるわけ？」
「ああ、すごい暴れっぷりだったよ、母さんはね……」

第三話　戦士一族の襲来（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
では、次回もいつになるかはわかりませんが（毎回言ってますね…）、またご覧いただけたら光栄です。

第四話　母さんの家出（前書き）

今日はずいぶん寒いです……第四話をお届けします。

第四話　母さんの家出

稲妻家の大黒柱ともいえる母、棗は庶民の家庭で育ったということも影響してか、献身的でかつ慎み深い女性だ。だが商業人の娘であるため、金銭面に関しては人格が変わるほど厳しい人だった。特に今現在の経済的に追い詰められた状況の中で夫の面接落ちが知らされ、相当の怒りが爆発したように見えた。

「で、母さんはどこ行ったの？」

「そのまま出ていったんじゃない？　俺だってしばらく前に帰ってきたばっかりなんだから。詳しいことは本人に聞いてよ」

棗をそこまで激昂させた張本人である鬼灯は寝室で寝転がっていた。スーツを買うお金すら惜しいというのに、経済について一切興味もないらしくスーツ姿のままだった。当然、棗の暴走の掃除も紫苑にまかせっきりで、全く動く気配もない。

「父さんあのさ……」

「今日の面接は萌黄の言うことを聞いて、面接官に千年譲ってやったんだ」

「え、そうだったの？」

「千年譲ってやってだな、敬語で返事してやったんだ。そうしたら面接官の奴は何を口走ったと思う？」

嫌な予感が萌黄の頭を駆け巡る中、鬼灯は勢いをつけて身体を座らせる。

「わからないだろう、萌黄。まさかあの男の言ったことなどわかるまい。奴は言ったのだ、『声が小さい』とな！」

「声が小さいって……」

「私だって初めて敬語を使ってやることになったのだぞ。そのせいで柄にもなく緊張しているのも当たり前だろう。その中で答えてやったというのにだ、あの分からず屋は一言『声が小さい』と言い出

した。わかるか萌黄、この屈辱感。今まで生きてきて三十三年、あんな仕打ちを受けたのは初めてだ。全部馬鹿馬鹿しくなって、本当に奴を破壊してしまうところだった」
「破壊って、まさか父さん手を出しちゃったの！？」
通りで、それならば棗のかつてない暴れようも理解できた。人間一人殺してしまうということは、立派な犯罪である。この経済的困窮の中で、一家の主が逮捕され（たぶんこちらだけではここまで暴れたりはしないだろう）、慰謝料なんかいろいろと払うことになったら、間違いなく一家は破産である。
だが、鬼灯は気にするなと言いたげに首を振っている。
「出しかけただけだ。いや、出せなかったと言うべきか。本当に殺してしまう衝動に襲われたんだが、殺せなかったんだ。はっきり言って殺してやりたかったけどな。あんな奴木端微塵にしてミンチ肉にしてカラスの餌にしてやりたかった」
「何それ、言ってることが残虐すぎて人間じゃないよ」
「残虐も人間の性（さが）だぞ。それで殺せなかったから一発奴の腹に拳を見舞ってやって帰ってきたわけだ。どうだ、私も丸くなっただろう」
結局手を出して帰ってきたというのは、萌黄に伝わった。やはりこの人に就職なんてものは向いていないらしい。母さんがこのまま帰ってこなかったら、生活なんてとてもやってはいけないのだ。だから棗の機嫌を損ねないというのが稲妻家の暗黙の了解になっていたはずだったが、やはり鬼灯はそんなものにも気づいてはいなかったようだ。
これ以上話を聞いていても埒があかない。萌黄は肩から通学鞄を下ろして、本来伝えたかった話を切り出した。
「その話は後でしよう。それよりも、父さんに伝えなきゃならないことあるの」
「なんだ、結婚など断じて許さんぞ。お前はまだ十五になったばかりだろう」
「違うわよ、それにそんなことは知ってる。じゃなくて、今こっち

の世界に――戦士一族が来てるのよ」
突然本筋を切り出したのはまずかったのだろうか。鬼灯どころか紫苑までもが、時が止まったかのように硬直してしまった。それも瞬き一つしないから、萌黄からすれば怖いだけである。しかし五秒ほどして二人を凍らせていた氷が一瞬にして溶けた。
「本当か、萌黄！」
父子は声を揃えて萌黄を取り囲んだ。
「本当。じゃなきゃそんな嫌な話ジョークでもしないわよ。あたしのクラスに転校してきたんだけど、急に『魔王（父さん）はどこにいる』なんて言い出して、脅されて大変だったんだから」
「その様子じゃ答えなかったようだな」
「当たり前よ。答えたりなんかしたら、今度こそあたしたち殺されるもの」
「だよなあ……せっかく三年もこっちで生活できてたのに、なんで今更この平穏を崩しにきたのかな。考えられない」
この生活を一番楽しんでいたであろう紫苑はすでに口を尖らせて目頭を赤くしている。貧しくて辛いことも多かったけれど、彼にとっては誰からも襲われないという平和な世界だったのだ。その安心が崩れるのは一番不安なことだろう。対して、戦士一族に狙われている本人はこの事態を重く受け止めているようだった。
「萌黄、できるだけ奴と関わるな。エスカレートするようなら学校も行かなくていい。あと、いざとなったら魔術で逃げろ……紫苑もだ」
こっちの世界に来て以来魔術使用はしないよう、両親から硬く言いつけられてきた。この世界を追放されればもう行く場所はないからと、世界に順応した生活を送るためだった。しかしその言いつけも関係なくなった。やはり稲妻家にとって状況は最悪と言えた。
「あと、例の剣は持ってきていたのか？」
「さすがに学校じゃ持ってきてないみたいだけど……」
「そうか……よし、今から母さんを連れ戻しに行ってくる。こんな

ときに一人歩きしていてはさすがにまずいだろうからな」
鬼灯は有無を言わせず早口に言うと、そのまま玄関のドアを開けっ放しにして外へ駆け出していった。子供たちに残した横顔は珍しく切羽詰った表情をしていた。
流れ込んでくる隙間風が、萌黄と紫苑の脇をすり抜けていった。

第四話　母さんの家出（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
では、次はいつになるのでしょう？　気長にお付き合いください。

第五話　机上のラブレター（前書き）

第五話となりました。このお話を投稿し始めてもう一週間です。
時が経つのは本当に早いですね。

第五話　机上のラブレター

その晩に両親は帰ってこなかった。萌黄と紫苑はふやけたカップラーメンを食べ、二人が帰ってくることをずっと待っていた。だが午前三時を過ぎたころには、そのままキッチンで眠ってしまっていた。

このまま目が覚めたら何もかもなかったことになっていればいいのに。そうしたらずっとこの家で暮らしていけるのにな。

二人の思いはいつにもなく合致していた。

＊

「実は私、スタートリガーさんのこと……」

「いいんだ、言わなくていい。君は、何も悪くはないんだ。今まで万引きを繰り返してきたせいだと思うさ」

「そんな、私は、私はあなたの信じる思いを裏切ったの！　裏切って、魔王の手下なんかに、引き込まれてしまったの……」

ずっと想ってきた月子さんは魔王に通じるスパイだった。それを知ったスタートリガーはどうするのか？

次回、「愛する想いは金星（ヴィーナス）より美しい」お楽しみに！

萌黄が目覚めたときには、紫苑はテレビの前でスタートリガー鑑賞をしていた。萌黄が起きた気配に気づいた紫苑はテレビを消してキッチンに自ら出向いた。

「なあ萌黄、今日の魔王の手下は……」

「母さんと父さんは帰ってきたの？」
尋ねるや否や紫苑の顔色は一気に暗くなった。それだけで状況はわかりきった。まだ帰ってきてはいないのだ。二人が家を出てからもう一晩が経ったというのに。
ふとよぎるのは昨日出会ったばかりの千臣の声だった。魔王はどこにいる。あの声がずっと耳について離れない。
「紫苑、あたし今日学校行くわ」
「なんだよそれ。その戦士一族に会いに行くとか言うんだろ」
「もちろん。あの千臣とかいう奴ならきっと何か知ってるはずよ」
「……萌黄まで襲われたらどうするんだよ」
「あたしの魔術を使えば何があろうと絶対逃げられる。あんたもわかってるでしょ。そんなに心配ならあんたも学校に来なさい」
「嫌だね。俺は待ってるよ、父さんたちのこと……帰ってくるかもしれないし」
結局萌黄は一人で学校に赴くことになった。
実際は、心の底から不安だったけれど。
それでも、校門をくぐり、いつものように登校するのだった。

＊

「知ってる、萌ちゃん？　さっきの移動教室の時間のうちに、千臣君の机の上に誰かがラブレター置いたんだって」
三年一組の教室に帰るなり怪訝な顔でリッちゃんが言うから、興味ないと言っていた萌黄もさすがに慌ててしまった。
「ら、ラブレター？」
「うんうん、真っ白な封筒の中に真っ白な便箋で、味も素っ気もなかったんだけど、それがまた千臣君の好みなんじゃないかって皆大騒ぎ。しかも誰が置いたのか誰も見てないって言うのが不思議なん

だよね。当の千臣君に聞いても教えてくれなかったみたいだし。それがまた怪しいの。だから今は皆で探りあい状態らしいよ、声には出してないけど。一番怪しいのが千臣君の前の席に座ってる神崎さんなんだけど、彼女の性格じゃあこんな小細工しないで堂々としそうだし。それとも裏をかいてこういう手を使ってきたのかな……」

クラス一の噂通で情報通のリッちゃんは聞きだした内容をノートにまとめていた。この才能もうまく使えば警察官なんかに役立ちそうなのに。紫苑といい、リッちゃんも才能の持ち腐れであり、本人は真面目に取り組んでいる。

とはいえさすがにリッちゃんも知らないことがある。

差出人が誰であるかということと、手紙を読み終えた千臣が破いてゴミ箱に捨てていたということを。

ラブレターなんかではなかった。

茶々先生によるくだけたホームルームが終わるなり、萌黄は一番に教室を出た。リッちゃんには理科の先生から呼び出しを食らっていると言ってある。無二の親友であるリッちゃんに嘘をつくのは心が痛んだが、今はそんなことを言っていられる余裕はないのだ。リッちゃんにはあとで謝ることにして、萌黄は第二理科室の裏側で足を止めた。

そこは教師らの駐車場だった。通勤に使っている車がずらずらと列を正して並んでいる。ここに生徒が来る可能性は低い。ましてやこの場所を知っている生徒すら少ないと思われるほどだ。だから一つの人影が現れた瞬間、それが誰だか一目瞭然だった。

「ようやく魔王の居場所を吐く気になったのか？」

逆行がさす中、千臣はゆっくりとその身を晒しだした。

「――あなた知ってるんでしょ？」

「何を」

「聞かなくても父さんと母さんの居場所ぐらい知ってるんでしょ？」

その答えを聞き出すまで萌黄は一歩も引かないつもりでいた。千臣はしばらく目を点にしていたが、萌黄の真剣な瞳を見るなり鼻で

笑った。
「知らないと言ったらどうする？」
想定内だ。不敵な笑みを返し、萌黄はためらわず右の拳を硬く握った。
「その硬い口を開かせるまでよ」
「結局力でねじ伏せるって言うのか？　父親似だな……」
「お褒めの言葉と受け取っておくわ」
千臣は鞄を理科室の陰に放った。そして制服のポケットから折りたたみ式のナイフを取り出し、その刃を陽に晒した。
「今はさすがに『鬼の紅剣（デーモンブラッド）』は持ってないんだ。学校だからな……これでやらせてもらう」
「そう、何をしようがお任せするわ。でもね、あなたに手間取ってなんかいられるほどあたしは暇じゃないの。だから一秒で黙らせてあげる……」
流れる風が、止まった。
萌黄の微笑が、一瞬だけ消えた。
と思ったが最後、千臣はコンクリートの上にうずくまっていた。

第五話　机上のラブレター（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
千臣君に圧勝しちゃった萌黄ですが、いったいどうなるのでしょう？
次回も、気長にお付き合いください。

第六話　母さんの行方

「さあ居場所を言いなさい」
萌黄は平伏す千臣の顔の目の前で歩を止め、冷酷に言い捨てた。
とはいえ、内心は想定外だった。まさか萌黄たち一家を追放した実力の持ち主である戦士一族が、こんなにあっさりと魔術攻撃にかかるなんて。しかも自分に何が起きたのかわかっていない様子からして、萌黄の魔術についての知識もないらしい。
もはや彼の身体はほとんど動かないだろう。ほんの数秒の間に数十発殴られたのだから。
「さすがは魔王女、並の人間が扱える魔術とは一風違っているな……」
「感想はいらないの。だから早く二人の居場所を答えなさい。答えなければ、もう一回食らわせるわよ」
足元からため息が聞こえた。見下ろしてみれば、千臣は動かないはずであろう身体を軽く持ち上げてその場に胡坐をかいていた。なるほど、戦士一族の身体能力は伊達ではないらしい。
「――これはどういう魔術なんだ、嬢子？」
「時間魔術、不順（ストイム）なる時。魔王女様しか用いれない魔術なのよ」
空から、少女の声が降りかかった気がした。いや、気ではなかった。
見上げるとそこには例のストーカー彼女・嬢子が、文字通り掃除用の箒にまたがって宙に浮かんでいた。その姿は野獣ではなく魔女のそれだった。
「それはそうと大丈夫なの？　気になって来てみたらもう惨敗してるけど……？」
「わかってるんなら早く来てくれたっていいだろ」
「あら、私を頼りにしてくれているの。大丈夫、魔王女様の魔術は

私には効かないからねぇ」
　嬢子の視線が萌黄の身体に刺さっていた。確かに彼女の言う通りなのだ。宙に浮いている彼女を殴ることなど、地上にいる萌黄には不可能なのだ。ここまで千臣を追い詰めておきながら状況をひっくり返されることになるとは不覚だった。
　状況を改めて逃げるしかない。
「させませんよ、お姉さま！」
　嬢子が叫んだ瞬間、萌黄の身体は地に叩きつけられた。身体は動かない。急激に重くなった身体は、どれだけ命令しても微塵とも動かない。
「何、この魔術……あんた、なんなの」
　身体がろくに動かせないこの状況では逃げたくても逃げることはできない。それがわかっていて、嬢子は哀れんだ目で萌黄を見ている。
「私は紫苑さまの恋人の、金馬嬢子です。母は魔女一族の末裔で、父は魔王家追放の首謀者ですけど。魔術は秘密ですよ、敵同士ですしね」
「あんた、あの大臣の娘なの……？」
「あ、今は大臣じゃなくて大統領なんですけどね。傲慢な王政はとっくに廃止になりましたの」
「何で今さら追ってくるのよ……！」
「父上の命令です。魔王の血を奪ってくるように、と。早速ですけどいい血が手に入りそうですわ。ありがとうございますお姉さま。ほら篤志君、あなたの憎き魔王家を殺してしまいなさいよ」
　言われて面倒臭そうに千臣は立ち上がり、もう一度ナイフを手に取った。
「自分でやれよ。俺は魔王をこの手で倒したいだけだ。他はどうでもいい」
「その割にやる気でしょ？」
　千臣も嬢子もあまりに気楽な会話をしているが、萌黄からすれば、

千臣が迫り来る足音は死へのカウントダウンのように聞こえた。本当に迂闊だったと今になって思う。棗と鬼灯が黙らされた相手なのだ。自分なんかが勝てるはずもない。自意識過剰にも程があった。

ごめん、紫苑。あんたの言うとおりにしておいたほうがよかったわね。

「萌黄！」

諦めをつけて瞳を閉じていたところに、声がした。それは毎日のように聞く、弟の声だった。重い瞼を開くと、すでに紫苑が萌黄の腕に触れていて、即座に状況を読み取ったようだった。

「紫苑、なんであんた……」

「話は後でするから。さっさと退こう」

そのまま彼は萌黄ごと、体育館裏から消え去った。現れてから消えるまで、たったの五秒。さすがの戦士一族と魔女一族も手出しはできなかったようだ。

「わ、紫苑さま！」

もっとも、嬢子は違う理由で手は出さなかったようだが。

＊

紫苑の得意とする魔術系統は空間魔術、空想（アピス）だった。脳内で想像した空間に転移する魔術で、それは実質上空間移動と呼べるものである。使った本人と、触れている者を選択して、想像できる限りの移動を可能とする。

アピスによって紫苑と萌黄はなんとか自宅に帰ってこられた。助かったというのが萌黄の一番の感情だった。あの時紫苑が学校に来ていなかったら、きっとあの二人に殺されていたところだろう。安心と動揺が交錯する中、萌黄に更なる事態が報告された。

「萌黄、おかえり」

「母さん、無事だったの？」
棗はリビングでコーヒーを飲んでいた。まるで日常のように淡々とした笑顔で出迎えてくれた。
「ほら、荷物下ろしなさいよ。まずはそれから」
「何で無事なのよ……あたし、不安で、心配してたのに」
気を抜けば簡単に涙は零れていた。鞄を落とし膝を落とした萌黄を、棗は温かく抱きしめていた。
「ごめんね、母さんも馬鹿だったわ。父さんが就職できるわけなんてないのに、期待ばっかりしてた……そのせいで思い余って家出しちゃった。昨日の夜はね、友達の家にお世話になってたの。ごめんね萌黄、紫苑にも散々怒られちゃった。でも嬉しかったのよ、皆心配してくれて。特に父さんなんか、柄にもなく慌てて私の友達の家に飛び込んできて、友達に笑い者になっちゃったわ」
「感動の再会中悪いが何で私の悪口ばかり言っているのだ、母さん」
すっかり疲れきった鬼灯の声が寝室から聞こえてくる。
二人とも無事だった。しかも、千臣も嬢子も関係なく単なる家出だった。
それなのに。いや、それだから。
萌黄の涙は、鬼灯に一喝されるまで止まらなかったのだ。

第六話　母さんの行方（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
では、次回はいつになるのかわかりませんが、気長にお付き合いください。

第七話　ピアノの音色（前書き）

今回は間が開いてしまいました。第七話です。

第七話　ピアノの音色

改めて、棗にも戦士一族と魔女一族の襲来について話しておいた。最初は冗談でも言っているのかという顔で、最後には辛辣な表情で萌黄の話を聞いていた。一通り話し終えたところで、棗は一つ咳払いしてそっと心を落ち着かせていた。

「それで父さんあんなに慌てていたのね。萌黄も何事もなくてよかったわ」

「何事もないっていうか、俺が来なけりゃ殺されてただろうけどね」

真っ向からの皮肉を言う紫苑を見て、萌黄はようやく彼にも一番に尋ねたいことがあったことを思い出した。

「そうだ、紫苑。あんたの彼女、魔女一族なのよ。今すぐ別れなさい」

「は？　彼女ってまさか金馬嬢子のことだったりする？」

紫苑が顔を真っ青にしている背後で、聞き捨てならんと両親は肩を並べて顔を突き出した。

「なんだと紫苑、お前に彼女だと？　何を言っているのだ、お前は母さんの隣でなければ寝られない子どもだったろう」

「それ何年前の話なの。それよりもね、彼女が魔女一族だってことが問題なのよ。紫苑も父さんの血を引く子ですもの、女遊びの一つや二つ、そろそろ始めるころだと思っていたの。でもね、相手ぐらいは考えなさい、例えば常識的で普通の子だったら母さんたち何も言わないのよ、わかる？」

二人がかりでふざけ倒され、紫苑は堪忍袋の緒が切れそうになりながらも何とか堪えて、愛想笑いを続ける萌黄にその怒りの切っ先をぶつけた。

「萌黄、余計なこと言うなよ。俺は母さんの隣でなくても寝られるし、女遊びなんて一回もやったことがない」

「わかってるわよ。でも、彼女なんでしょ？　あの獣娘、躊躇いなくあたしに言ってのけたけど」
「違う！　断じて違う。あんな奴彼女なわけないだろ……あの女は勝手に彼女名乗って付きまとってくる勘違い系のストーカーだよ。それにあの女が転校してきたのは昨日だったんだから、彼女になんてするわけないだろ」
即答されて、萌黄は安心した。嬢子が彼女だと本人の口からも言われてしまったら、輪をかけて手が付けられなくなる。
「そう。でも昨日転校してきたって、千臣篤志と同じじゃない」
「面倒なことになってきてるな。あんまりこっちの世界で派手に動きたくないっていう俺たちのことわかってて、あの二人は手荒な真似するんだよ。この手口、第二十五話と同じだ……スタートリガーが変身できないとわかってて校内に潜入する魔王の手下の話。あの手口は確かにいい手口だとは思ったんだけど、結局スタートリガーが授業抜け出して誰もいないところで変身しちゃったからなあ」
一人の世界にトリップしてしまった紫苑は放っておいて、さらに心配が募る萌黄は、棗と口喧嘩に発展していた鬼灯を諌めて相談を持ちかけた。
「父さん、なんで戦士一族は父さんを狙ってるんだと思う？」
「それは……、私が今までやってきたことへの復讐だろう。何人殺したかはもう覚えてはないが戦士一族も相当だろうからな」
「じゃあ、魔女一族が何で魔王の血を求めてると思う……？」
「その魔女の娘は大臣の娘でもあると言ったな……」
そこで鬼灯は突然言葉を緩めた。
「父さん？」
萌黄が尋ねても、鬼灯は顔をしかめたまま何も言わない。急に立ち上がったと思うと、テーブルの上に置いてあった一枚の紙を手に取った。それは、一昨日に学校から貰ってきた手紙――授業参観の出欠届けだった。参観日は明後日だが、棗の仕事の都合と合わず、鬼灯も行く気がなかったため、すでに欠席に丸が付けられていたは

ずだ。
「これに出席するぞ。戦士一族と魔女一族とやらの顔を拝んでやる」

＊

千臣と嬢子の襲撃から一日経ち、今日はさすがに学校を休もうかと思った。とはいえ父さんが急に授業参観に参加すると言い出したものだから、その出席届けを今日中に提出する必要があったのだ。
提出したら何らかの理由をつけて帰ろうかとも思っていた。しかし千臣も教室では何もしてこないこともわかっているから、萌黄はとりあえず一通りの授業は受けて帰ることにした。
数学の授業と千臣に集る女子の声をぼんやり聞きながら、窓の外から運動場を眺めてみる。リレーの授業のようで、体操着姿の少女たちが楕円の上を回り続けている。同じところをずっと回り続けて何が楽しいんだろうか。教師の授業も聞き取れないし、段々眠くなってくる。
どこからだろう。ピアノの音が聞こえる。その音が校内中を反響しているようだ。音楽室からだろう。優雅なワルツで、どこかで聞いたことがある曲だった。
「夢見の幻想曲ｏｐ．１５」。そんな感じのタイトルだったように思う。確か聞いていれば皆だんだんうとうとしてくる曲だって、あの人が言っていたような気がする。
懐かしいな。
「起きろ萌黄！」
揺さぶる少年の声で萌黄の重い瞳は強引に開かれた。そこには紫苑が立っていた。
「何やってんの紫苑。ここは三年一組の教室よ」
「わかってる。今、校内中がこのピアノの音色で眠りについてしま

ってるんだよ！」

頭の中で彼が叫ぶ意味を理解できるのにはずいぶんかかった。だが、教室の中、誰一人として起きている者がいない現実に気づくのは間もなくのことだった。

第七話　ピアノの音色（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
では、次回はいつになるのかわかりませんが、気長にお付き合いください。

第八話　神様のお告げ

授業に飽きて机に伏せている男子生徒。千臣のことしか目がなく彼の座席の周りに集る女子生徒。数学の公式を板書していた中年教師。その誰もが、魂が抜けたように意識を失っていた。しっかり寝息は立てているし、人によってはいびきまでかいてしまっているから、眠りについただけなのはわかる。紫苑によると、他のクラス全てがこのような状態になってしまっているという。

「萌黄、この曲知ってるよね？」

「うん。夢見の幻想曲でしょ？　聞いているとだんだん眠気が襲ってくる波長のピアノ曲よね。でもあの曲ってこんなに熟睡させる曲じゃないでしょ？　しかもこっちの世界の曲じゃないのに……それになんであたしたちだけ起きてるの？」

「詳しいことはわからないけど、弾いてるのが誰なのかはわかるよ。魔界の曲を知ってる人間って言えば、魔界から来た人間だけでしょ」

紫苑が見つめるのに誘われて、萌黄は女子で埋もれた千臣の座席を動かした。しかしそこにいるはずの千臣の姿はすでに消えていた。

「――千臣篤志か、金馬嬢子ってことね。まさか強硬手段に出るなんて、本当に考えられないほどせっかちだわ」

「俺たちを誘い込んでるのは間違いないだろうね。どうする萌黄？」

「どうする、って行くしかないでしょ。このまま皆を眠らせておいたら問題になるじゃない。そうしたらあたしたち、この世界からも追放されるわ。それだけは避けなくちゃ」

数学のノートを閉じて萌黄は重い腰を上げた。向かうは芸術棟三階にある音楽室である。

「やっぱり、行かないといけないんだよなあ……」

いつになくやる気がない紫苑は肩をがっくりと落として、萌黄のあとについていった。

＊

音楽室には、やはり二人の気配があった。ピアノを弾いているのがツインテール少女で、一番前の座席の机に足を組んで座っているのが無表情少年だ。その腕に絡められているのは、鞘に収められた一本の長剣だった。見ているだけで威圧感と禍々しさを与えるこの剣は、戦士一族の家宝でもあった。

「あれって鬼の紅剣（デーモンブラッド）じゃないか！」

声を消しつつ紫苑は叫んだ。目を見開いている彼の呼吸は間違いなく速さを増していた。

「紫苑？」

「何で学校にまで持ってきてるんだよ……萌黄、やっぱり駄目だ、帰ってもいい？」

「今更どうしたのよ？」

「萌黄だって知ってるでしょ、俺は、あの剣に……。嫌だ、思い出したくもない。やっぱり帰る！」

目が泳いで錯乱しているまま、勝手に紫苑はアピスを使ってその場から逃げ出してしまった。

萌黄だって知っていた。次期魔王候補として、幼いころから紫苑は勇者四人衆のような反魔王勢力から狙われ続け、何度も殺されかかった経験をもつことを。それゆえ彼は争いや血が流れるような行為を本能的に避けてきていた。

わからないわけではなかった。萌黄もクーデターの際、酷い光景を何度も目にした。だから、ずっと平和な世界の中で暮らしたかった。

それなのに、彼らはこの世界に現れた。

「隠れてないで出てきたらどうなんだ、魔王女」

千臣の声だった。呼ばれて素直に隠れているわけにもいかない。萌黄は大人しく音楽室に顔を覗かせた。
「随分なことをしてくれるじゃない。学校中を眠らせるなんて、あたしたちを呼び出すのならもっといい案はなかったの？」
ピアノを弾く嬢子は集中しているらしく反応しない。代わりに千臣は鬼の紅剣を携えて、萌黄の眼前に仁王立ちした。
「どんな案を使ったかは関係ない。歴史に残るのは結果だけだ」
「あなたは一度あたしに負けてるのよ」
「だから、そんなことは結果には残らないんだ……」
冷酷に言って千臣は鬼の紅剣を鞘から抜き去った。その刀身は血に染まったように赤黒い。
「はっきり言ってあんまりお前には興味ない。でも嬢子のために斬らせてもらう」
彼の太刀筋は常人では目に入らぬほど異様に速かった。だが最初から身構えていた萌黄の反応がそれを上回った。時間軸を渡り歩くことができる時間魔術である不順（ストイム）なる時を使い、未来に逃げる選択もできた。いや、彼の突きを避けるために咄嗟にそう判断したつもりだった。
だが、魔術は発動しなかった。
「え、なんで……！」
迫る刃から声が零れる。
「鬼の紅剣の力を知らないのか？　剣の届く範囲の魔術をすべて無効化するんだけど」
知らなかった。萌黄は今さら思い知らされた。なぜ最強の魔王であった鬼灯が圧倒され、この現界に追放されたのか――この鬼の紅剣があったからなのだと。
刃の刀身に映る虚ろな千臣の表情が、刹那満足した笑顔に変わった。
息を呑んで、瞼を閉じた。
だが、空を裂いていた鬼の紅剣は、止まっていた。萌黄の心臓を

捉えたまま、動かない。どころか、鬼の紅剣は弾き飛ばされてしまった。
ピアノの演奏が揺らぐ。
「お前、邪魔する気か」
「……神様のお告げに逆らう奴は、俺が止めさせてもらうでー？」
千臣の動揺を打ち消して、音楽室に擦ったような足音が現れた。
萌黄が振り返ると、そこには三組の松陵（しょうりょう）圭太が白い歯をちらつかせて立っていた。

第八話　神様のお告げ（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
では次回もいつになるかわかりませんが、気長にお付き合いください。

第九話　攻守の狂想曲（前書き）

第九話です。
第一話のときから構想していた関西系キャラ、ようやく登場です。

第九話　攻守の狂想曲

「本当にお前ってせっかちやな、千臣」
松陵圭太はピアノが独奏を続ける音楽室に、何の躊躇いもなく入り込んできた。金髪ピアスの校則違反常習の彼は千臣の不信感も気にすることはなかった。さらには呆気に取られている萌黄を庇うように立ちふさがった。
千臣の表情がさらに暗くなる。
「なんでお前が魔王女を庇う」
「だから言ったやろ、神様のお告げや。今、彼女を殺せなんていうお告げは出てない。つまり逆を言うと何があっても彼女を守らなあかんねや。わかるか？」
「わからないな、僧侶一族の考えは。今まで同じ学校に在籍していて一つも手を出さなかったようだしな……邪魔をするならお前ごと斬るぞ」
「あー、ほんませっかちやな。っていうか、防御を司る僧侶一族を貫通できると思ってるん？」
萌黄は千臣と松陵の諍いに口が出せずにいた。口を挟む余地がないのももちろんのこと、今の状況をうまく理解できずにいたのが実際の理由だった。第一、自らを僧侶一族と名乗る松陵の言いたいことがまったく理解できない。萌黄たち魔王側からすれば、僧侶一族も勇者四人衆の一角を担っている一族であり、そんな彼が同じく勇者四人衆の戦士一族である千臣といがみ合うわけがない。
確かに、僧侶一族は独自の神様を信仰しているとも聞いたことはあったが。
「魔王女ちゃん」
千臣を侮蔑のまなざしで挑発しているまま、松陵は馴れ馴れしく声をかけてきた。

「な、何よ」
「今から俺が頑固な千臣を止めといてあげる。まあ、時間稼ぎにしかならんやろうけど。その間に魔王女ちゃんはピアノの演奏を止めるんや。さすがに嬢子も弾きながら魔術は使われへんから。わかったか？」
「あなた、あの二人の仲間じゃないの？　そうやってあたしを嵌めるつもりなんじゃ……」
「むー、そんなことやる訳ないのに……そう言われたら元も子もないやん。でもぼーっとしてるよりはマシやと思わん？」
「そうだけど……あなた信用できないわ。それにその作戦をあの二人の前で堂々と話してる時点で意味ないだろうし」
「そんなことないって。作戦なんて言っても言わんかっても――」
感情に任せて松陵は思わず振り返ってしまっていた。間髪入れず紅が彼の頭上に迫る。
が、松陵が突き出した右手によって鬼の紅剣は貫通を防がれた。冷や汗ばかりかいてしまう萌黄に反して、松陵は余裕を持った笑みで千臣に対峙する。
「だから、なんで話の途中に斬り込んでくるかなあ。そんなんしたって一緒やのに」
「一緒なら手際よく終わらせたほうがいい」
「困るなあ、それやから一匹狼って言われんねんで。扱いにくい人間はこれやから嫌や」
一言一言棘のある言葉を投げかけるたびに千臣の斬撃が襲い掛かる。そのたびに松陵は右手の先に不可視の防御壁を作り上げ応戦する。
その場に似つかないワルツが乱れなく流れていく。
ようやく萌黄は震える足に力を込め歩みだした。嬢子が奏でるグランドピアノまでの距離は歩数にして二十歩もない。歩みを走りに変えればさらに近くなる。
「調子に乗るな」

「調子には乗ってるよ、お前と違って生まれつきな」
意外にも松陵は千臣をしっかり足止めしている。
十秒もかからぬうちにピアノに触れられた。さすがに嬢子は顔色がさっと青ざめだして、ピアノの演奏が再び乱れを始める。真っ先に萌黄は嬢子の両手首を鷲づかみにする。鍵盤からその手が外れようとし始める。
「弾くのはやめなさい」
「お、お姉さま、離してください！」
「離せといって離すと思うの？」
「離してくださらないのですか？」
「当たり前じゃない」
黒鍵が弾き返った。と同時に夢見の幻想曲は強制的にフィナーレを迎えた。
静まり返った音楽室。
嬢子の抵抗は激しさを増していた。気を抜けばあっという間にすり抜けられてしまいそうだった。
だが、音楽室のドアが開いて茶々先生が顔を覗かせたとわかると、嬢子は逃げ出してしまった。鬼の紅剣を握っていた千臣も、うまく松陵に隠されるようにして音楽室を後にした。

＊

「ごめん萌黄」
家の中に入ると、ようやく紫苑が口ごもりながら言った。今日は校門のところで待ち合わせに遅れた萌黄に文句ひとつ言わず、道中も何も言わずに帰ってきたのだ。
「あんなときに逃げてる場合じゃなかったのに、わかってたんだけど……」

「いいわよ今更」
通学鞄を床の上に放り投げて萌黄はその場に倒れこんだ。
「あんたは来なくてよかったの。勇者四人衆のうち三つの一族が揃ってしまうなんていう場所に来て、はっきり言って無事なのが奇跡なんだろうし」
学校に鬼の紅剣を持ってきた千臣篤志。それだけでも骨が折れるのに、魔術を込めたピアノを奏でる腕まで持つ金馬嬢子。そしてなぜか神様のお告げで彼らに歯向かった松陵圭太。
「学校、もう行かないほうがいいかな……」
紫苑の呟きが胸に刺さる。できるだけ普通の生活をしたかったのに、やはりそんなことは無理だった。
参観日の出席票だけテーブルの上に残しておいて、萌黄は午後四時に寝室で眠りについた。

第九話　攻守の狂想曲（後書き）

と、今回はここまでです。

では、次もいつになるのかわかりませんが、気長にお付き合いください。

第十話　参観日の勇者達

理由が何であろうが、邪魔者は消し去るに限るな。
音楽室の事件を受けて、ついに昨日鬼灯は決断した。今まで殺人を犯すことなど躊躇っていた。だが、家族に危険が迫りそれが後を絶たないと聞けば、もうおとなしくはしていられない。そういうことだった。
都合もよく今日は授業参観日である。
三年一組の教室で今日も女子を虜にしている千臣を黙らせるいい機会だった。
「ねえ萌ちゃん、今日の参観誰か来るの？」
昼休みにリッちゃんが目を輝かせて詰め寄ってきた。リッちゃんの目当てはわかっている。萌黄は肩を竦めて腕を組んだ。
「うちは父さんが来るよ」
「え、本当？　珍しいね、萌ちゃんのお父さんって滅多に学校に来てくれないので有名だよ？」
「有名、なの？」
「有名だよ、私の中で。萌ちゃんのお父さんに会えるのって、萌ちゃんが転校してきた日以来かなあ。うわあわくわくする。本当に格好いいもんね、あの風貌で中学生の子供がいるなんて信じられないよ。私も十年ぐらい生まれるのが早かったらなあ……」
妄想し始めたリッちゃんはもう手がつけられない。父さんのどこがいいんだろう、と萌黄は首を傾げるばかりだ。ああ見えて実際は家の中でぐうたらして一日を過ごしている、なんて間違ってもリッちゃんには言えない。
「皆、席につくように」
茶々先生が教室のドアをくぐると同時に、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り出した。

担当科目が音楽で、いつもなら音楽室にいる茶々先生が授業時間中の教室に現れることは珍しかった。しかも先生は半袖の白いＴシャツにジャージを穿いていて、頭には赤い鉢巻が巻かれている。しかも、その鉢巻には日の丸と必勝の二文字がくっきり浮かんでいる。
「ティーチャー何ふざけちゃってんの？」
ある女子の一言から一斉に笑いの渦が巻き上がる。茶々先生は相変わらずなぜか照れて、改めて大きな咳払いで生徒たちを諌めた。
「先生も恥ずかしいんだ、わかってくれ。えー、今日の参観は親御さんとの交流も兼ねて、体育館で行うことになった。あー、服は着替えなくていいぞ、大した動きはしないからな。だから全員素早く体育館に移動だ」
茶々先生の状態から運動をすることは見てとれた。しかも、親御さんとの交流ということは、あの鬼灯が何らかの運動をするということになる。
考えられない。
萌黄の心など気にも掛けず、リッちゃんはガッツポーズをして丸眼鏡を輝かせている。
「よーし、ボディタッチもできるのね！」
「悪趣味だよ、リッちゃん」

＊

体育館に集合したのは三年生全員とその保護者三十六人だった。
「えー、では今日はドッジボールをするぞ。一組・二組・三組と、親御さんを一グループにしてトーナメント形式で行う。あー、ソフトドッジボールなんで保護者の方も安心してください」
茶々先生はピンクのボールを抱えて、マイクで司会も担当している。生徒たちの加減のない様子を見て、さすがに遠慮したそうな保

護者が大半だった。そんな中、彼らは違った。鬼灯と、孫の参観に来たお爺さんは、互い火花を散らしあってライバル視しているようだった。

「爺さん、腰を痛めんうちにやめておけ。私は慰謝料を払わんぞ、一銭たりともな」

「くう、調子に乗れるのも今のうちだと知れ、若造。もしワシが倒した人数が若造より多ければ、その小豆色の髪を全部抜き去ってやるわ！」

「この赤茶の髪を小豆だと……そこまで喧嘩を売るのなら買ってやろう。私もそこまで冷たくはないのでな。代わりに爺さんの倒した人数が少なければ、一本抜き去ってやる」

「一本だと、今さら年寄りに遠慮か？」

「その目障りな前歯を一本抜いてやるのだ。ありがたく思え」

一組がいる側からは遠目でしか見えないが、しっかり鬼灯とお爺さんの声は聞こえている。

これから誰を倒すことになっているのかわかっているのかな。

萌黄は心配ばかりしかできない自分が悔しかった。

萌黄のいる一組は第一回戦で二組と当たった。千臣がボールに当たりそうになるたび、千臣がボールをキャッチするたび、千臣がボールを当てるたびに学年中の女子の歓声が巻き起こる。千臣からのボールに当たりたいと理解できないことを言って自ら身を投げる二組女子まで現れた。中でも一番怖いのは千臣の投げたボールがかわされたときだ。当人には女子たちのブーイングがのしかかり、後でお仕置きを受けさせられる。公衆の場で。

そんなことをしているから、三組との試合をしている保護者チームの方ばかり見ていても試合には勝っていた。

そして妙な熱気を発し続けていた保護者チームも当然の貫禄で圧勝したらしい。どうやら鬼灯とお爺さんも似た成績をおさめたようで、二人の敵対心もさらにヒートアップしている。惨敗した三組はとぼとぼ退場しながら、ため息混じりの声を溢れかえしている。

「何やねん、あのオッサンら……」
次はあの保護者チームと対戦なのか。
千臣も松陵も顔を知らないのか気づいてないけど、派手なことはやめてほしいなあ。
板ばさみの萌黄は試合前からボイコットしたかった。

第十話　参観日の勇者達（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
では、次回はいつになるのかわかりませんが、気長にお付き合いください。

第十一話　参観日の魔王達（前書き）

間が空きましたが、十一話です。

第十一話　参観日の魔王達

決勝戦の幕が上がった。
千臣応援団の女子の歓声が巻き起こり、萌黄と千臣がいる一組が入場する。そして向かい側に鬼灯とお爺さんが相変わらず諍いを続ける保護者チームが入場する。全く大人げがない。見ていられない萌黄も気にすることもない。
茶々先生のホイッスルが鳴った。
先制の保護者チームからお爺さんがボールを投げた。華奢な体型からは想像できない大振りなフォーム。そこから剛速球が放たれ、油断していたカップル男女を同時にアウトにさせた。が、当のお爺さんは妙なフォームの反動でついに腰を痛めてしまったらしく、体育館の床に丸まってしまった。しかし鬼灯には勝ち誇った強がりの笑みを叩きつける。
「ど、どうやらワシの勝ちのようじゃな……」
「ふざけるな、ボールを貸せ、こんな愚かな人間に負けるわけにはいかんのだ！」
ドッジボールのルールを「敵に当てる」としか知らない鬼灯は自陣コートから出て、一組側コートに入り込みボールを追い出した。もはやルールは気にしない。しかし鬼灯の追うボールを追う生徒はさすがにいない。こういう大人に巻き込まれたくないというのが見てわかる。が、一人の生徒が鬼灯の追っていたボールを拾い上げた。
そして、鬼灯の腹に思い切り投げ当てた。
「……千臣君カッコいいーーーーー！！！！」
鬼灯を外野送りにした千臣篤志は髪をかき上げてファンの声援に答えた。
「さっさと消えてくれ」
千臣が淡々と言葉を残していく横で、半ば強引に鬼灯は外野に連

れて行かれている。
頭が痛い萌黄にかまわず、結果決勝戦は一組が優勝して、幕が下りた。

＊

「お前、体育館に来い」
授業が終わって放課後になるなり、鬼灯は千臣に声を掛けた。こんな大人の言うことなど聞く耳持たないと思っていたが、千臣は群れる女子たちを掻き分けて後を追っていた。
正体を知られている萌黄は体育館の壁に張り付くように隠れて、体育館裏で堂々と仁王立ちしている鬼灯を眺めていた。それから五分もしない間に千臣は現れた。
その手には鞘に収められたままの鬼の紅剣が握られている。
「何の用っすか」
千臣は単刀直入に進み出た。対して鬼灯はできるだけ感情を殺して返す。
「さっきはよくもやってくれたな」
「ああ……あれか。あれはルールを破る方が悪いだろ。大人気ないと思いますけど」
「規則（ルール）だと？　それならお前は何でこんな物騒なものを持ってきているんだ？　この学校の規則とやらを知りたいな。こんな危険物を許可しているのか」
鋭い眼光で睨みをきかせる鬼灯に、千臣は面倒になったようにため息をついた。
「……疼いてるんだよな」
独り言のように言ったかと思うと、その鞘を払った。鬼の紅剣が天の下に露になる。

「さっきからこの剣が抜け、抜け、ってうるさいんだよな。これってどうしてなんだろうな」
土を踏む苦い音がゆっくり一歩一歩踏みしめて近づいてくる。思ったよりも早い展開に鬼灯は半歩後ろに下がった。
「こんなところで殺人を犯すつもりか、お前はすぐ捕まるぞ？」
「捕まったって構わない。やるべきことをやって自分が満足できれば、それで十分なんだ。お前、稲妻萌黄の父親なんだろう？」
一直線に飛び掛ってきた。
萌黄は躊躇いもなく二人の下にその身をさらしていた。だが、萌黄が見た光景は予想と遥かに違っていた。瞬く間に、体育館の傍らの茂みに二人の姿はあったのだ。
「この剣は処分させてもらうぞ、お前の首を取った後に」
いつのまにか、鬼灯の手に鬼の紅剣は収まっていた。そして、地面に転げさせられた千臣の首にじわりと血が滲むほど握った剣でつついていた。
魔術などは使った素振りはなかった。それ以前に、鬼の紅剣の範疇の中で魔術など持ちいれるわけはない。鬼灯の基本的な身体スペックが戦士一族のそれを上回っていた。それだけのことだった。
「くっ……馬鹿な」
「確かにお前は馬鹿だったな。まず鬼の紅剣を使って私を倒そうとしているその時点で馬鹿だ。これはクーデターのときに私の血を浴びた剣――いわば私の力を浴びた剣なのだぞ。そんな剣ごときに力の主である私が、二度も負けるはずないだろう」
「落とすなら早く首を落とせ……」
「落とせといって落とすわけがなかろう。お前は萌黄と紫苑を狙った重病の馬鹿だ。もはや薬の付け所がないほどのな。だから生かしてやる、お前を餌にこの件に関わった全員を炙り出して、串刺しにしてくれる」
萌黄は微弱な呼吸音すら消してしまいたかった。何かをされているわけではないのに、身体は動こうとしない。入ってはならない空

間がそこにあった。触れられれば、力を失って倒れてしまいそうになる。
とにかくこの場から身を隠したい。そんな萌黄の願望をすべて読み取っていたかのように、鬼灯は目もくれずに立ちすくむ萌黄に冷めた声をかけた。
「萌黄、紫苑を呼んでこい。この戦士一族ごと一旦家に退くぞ」
「うん……！」
解放された気持ちの方が大きかった。何も終わってはいないのに、緊張が解けて心に平安が戻る。いや、戻るはずだった。
しかし響く金属音に平安は容易く打ち砕かれていた。
「早くも餌に食いついてきたか……」
二つの影が、鬼灯と千臣の間に割り込んでいた。

第十一話　参観日の魔王達（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
では、次回はいつになるかわかりませんが、気長にお付き合いください。

第十二話　父さんの危機

「篤志君大丈夫！？」
宙に浮かぶ箒から落下してきた二人のうち、少女は泣き崩れそうな顔を隠すように千臣の手を取り起き上がらせた。そして落下してきたもう一人の少年は鬼の紅剣を構える鬼灯を弾き返して、即座に間隔を取った。嬢子も松陵も、圧倒的実力を目にし恐ろしさをぐっと堪えているのが萌黄にもわかる。
それを嘲笑うかのように鬼灯は鬼の紅剣で空を掻いた。
「その防御術……僧侶一族の神聖（ウォルド）な盾だな。それにそっちの小娘は魔女、か。手っ取り早く餌に群がるとは、素直に降伏に現れたか？
それとも勇者四人衆の格言――皆で行けば恐くない、か？」
「え、そんな格言あるんか？」
「あるわけないでしょ、犯罪者じゃあるまいし。それか、言うとしたらスタートリガーが万引きする時ぐらいだよ……」
松陵に素っ頓狂な口調で尋ねられ、嬢子はきっぱりと一度だけ首を横に振って諌めた。ふざけている余裕など全くありはしないようだった。彼女らにとって状況が劣勢なのは変わりないのだ。
と、その時箒が急降下して、荒れた地面にめり込んだ。
同時に、彼ら三人の姿が消えた、ように見えた。鬼灯が見上げた空の、丁度箒があったところに三人は浮かんでいた。それが嬢子の魔術であるのは萌黄にもわかった。
「では、一旦退かせていただきます」
「離せ松陵、俺はまだ何もやり遂げてはいないんだ」
「落ち着きや、一匹狼。お前が殺されるなんていう神様のお告げは出てない。こんなとこで殺されるわけにはいかんやろ」
突然導かれるように、鬼の紅剣は彼らの声に反応したのか震えだした。さらに声がする方に剣が引っ張り込まれていく。まるで主を

求める犬のように、意味がわかっていない鬼灯の手を華麗に振り払って宙に浮かんで追っていった。
そのまま三人は、鬼の紅剣から逃げるように空の向こうへ飛んでいってしまう。
「待て！」
鬼の紅剣を失った鬼灯は微かに彼らが見える校舎の陰に右腕をかざした。父さんが本気（魔術）を出す。萌黄は咄嗟に耳を塞ぎ瞳を閉じた。
しかし、沈黙のまま平和な参観日が過ぎていくだけだった。

＊

「最悪の状況かもしれん」
紫苑の空想（アビス）で萌黄たちは家に帰ってきた。が、部屋に入るなり鬼灯は一直線に寝室へ入り、扉の鍵まで閉めてしまった。放っておけばいずれ出てくるのは間違いないのだが、放っておけるほど猶予のある状況ではない。
「何があったんだよ、萌黄。まさか父さんが勇者四人衆を倒せなかったって言う？」
鬼灯の前では遠慮して口を開かなかったが、ついに紫苑は堪えきれずになったようだ。
「そのまさかよ。だから、落ち込むのも無理ないと思う」
「まさかって、何で倒せなかったんだよ、父さんの魔術は魔王家史上最強だったはずだろ。それが、効かなかったのか？」
「違う、効かなかったんじゃなくて……魔術が使えなかったのよ」
萌黄も自分の目で見て知っている。三人が逃げようとした時、間違いなくそれを阻止しようと魔術を使おうとしていた。だが、実際には何も起こりはせず彼らにも逃げられてしまったのだ。
最初は、魔術を無効化するという鬼の紅剣の影響かと思った。し

かし思い返してみれば、鬼灯が魔術を使用しようとしたその時にはすでに鬼の紅剣は随分離れていたはずだ。影響はないはずだった。
「魔術が使えないって……どうしたんだよ父さん、こんなときに」
「わかんないよ、少なくともあたしたちが口出しできるような問題じゃない。でも前から傾向はあったわ……前に面接落ちしたとき、父さん面接官を殺せなかったって言ってたじゃない？　それってもしかして、魔術が使えなかったせいなんじゃないかって今になって思うの……」
　確かに鬼灯はこちらの世界に来てからというもの、一度も魔術を行使したことがなかった。それゆえに三年ものブランクはある。とはいえ、魔王家における魔術は、幼いころから使いこなしを徹底して教わり、いわば本能的に扱えるものとなっていた。それなのにここに来て急に扱えなくなるという事態自体、遭遇したことのないものだった。
　寝室からは物音一つしない。
「このまま父さんが魔術を使えないままだったらどうするんだろ……俺も萌黄も母さんも、攻撃系魔術は使えないんだ。今、勇者四人衆に襲われたら対処なんてできないじゃないか」
　紫苑の言うことは警告ではなく現実だった。考えれば考えるほどに、現実が迫ってくる。
　だからといってどうすればいい？
　六時を過ぎて仕事から棗が帰ってきても、動揺が増えるだけで何一つ打開されることはなかった。
「……そんなことになっていたのね」
「母さん何とかできないの？」
　口を揃えて寄ってかかる子どもたちに、困惑した様子で棗は宥めるように口を開いた。
「ないことはないけど、それには父さんに相当な覚悟が――」
「わかっている、母さん」
　重く閉じられていた扉の鍵は覚悟によって開かれていた。

「だが危険を承知で一旦帰るしかないだろう、魔界へ」

第十二話　父さんの危機（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
話もそろそろ大きく展開すると思います……（予告？）
では、次回もいつになるのかわかりませんが、気長にお付き合いください。

第十三話　稲妻家の決断（前書き）

第十三話です。
この話でとりあえず第一章はおしまいです。

第十三話　稲妻家の決断

稲妻家のリビングに戦慄が走った。
「魔界に帰る……？　そんなことしたらあたしたち殺されるわ。永久追放されてるんだもの」
「確かにそうだ萌黄、だがこのままでは決して埒があかんのもわかるな」
「でも父さん、魔界に帰って何があるって言うんだよ。あんなところに逃げ帰るぐらいならこっちの世界にいたほうがよっぽど安全だと思う」
紫苑が言うなり、鬼灯の表情が暗転した。何とも言えない空気が部屋を充満させる。
「――紫苑」
「父さん？」
「お前もついてこい」
萌黄も紫苑も、耳を疑った。言ったことがお互い理解できなかった。
「あたしと母さんは？」
「待っていてくれ、何も全員で行く必要はない」
切羽詰っているらしく、鬼灯が大雑把な口調で割愛して答えるから、萌黄はぐっと静められた。だが想定外の言葉を聞いた紫苑は納得できずに鬼灯の真正面に立ちふさがった。
「何で、俺が……？」
「魔界への移動が原則封じられている今では、お前の空想（アピス）を使わねば魔界には戻れないのだ。それに曲りなりでもお前は私の跡を継ぐ身だろう。ある程度のことは伝えておく必要がある」
「伝えるって、今さら何を……」
「この魔王家には――代々の魔王しか知らん秘密があるということだ。普通成人したら話すものだが、お前は大人びているからな、構

わんだろう」
「それが今、何が関係してるんだよ……」
「関係あるから話しているんだ。明日にはここを発つぞ」
間に何も挟ませず一方的に言い切ると、再び鬼灯は寝室に篭(こも)ってしまった。突然のことに紫苑もリビングの隅で塞ぎ込んでしまった。
萌黄は食事の準備を始める棗の手伝いをしながら、二人のことをずっと気に掛けていた。等間隔で降ろされる包丁の音が気をかきたてる。
「萌黄、砂糖と塩間違えてない？」
自家製ドレッシングの調合を担当していた萌黄は棗の声でふと気がついた。慌てて流し台に捨てて、また一から作り直しだ。そんな萌黄を見かねて、棗は包丁で刻む手を止めた。
「あなたが心配することはないの。二人の代わりに落ち着かなくちゃ」
「そんなこと言われたって」
「大丈夫よ。魔界に戻って、エリザベスから魔力を返してもらえばきっと父さんの魔力も元に戻るから」
「エリザベスって、誰？」
「史上最強の魔力を誇った父さんはね、魔王に就任したときにその強すぎる魔力の一部を預けてるのよ。それが返ってこれば、魔術が使えなくなった父さんも最低少しは使えるでしょう」
「だから母さん、エリザベスって……」
棗はそのまま包丁を動かし始めた。その横顔は心なしか寂しそうに微笑んでいた。
「彼女は、魔界に残っているあなたたちの家族よ」

＊

夕食ののち、紫苑に誘われて萌黄はベランダに出た。ベランダに出るということは何らかの相談があるということは今までの生活でわかりきっている。紫苑は昔から両親よりも萌黄に相談することのほうが多かった。

「俺、やっぱりまだ恐いんだ」

目を合わせようとしない紫苑はいつになく小さく見えた。

「だってわかるだろ……あっちにはあのときのクーデターの首謀者が皆揃ってるんだ。また、捕まって拘束されて喉元にナイフを突きつけられて、あちこちを斬られて……目の前で城にいた皆が次々殺されていくんだ」

「紫苑」

「父さんは何もわかってないんだ、父さんはあのときずっと姿を隠していたから、こんなことがあったなんてこと知らないんだ。だから簡単に魔界に帰るなんて言えるんだよ！」

「……紫苑」

「わかってくれるよね、萌黄なら、この気持ち。でもきっと父さんは俺が何て言おうが魔界に行くつもりだ。そして俺は魔界に連れて行かれる……そこで父さんは魔王家の秘密を教えるって言ってた。だけど、魔王家なんてもう滅んだようなものだろ？　魔界でも権力は失ったし、現界（こっち）にいたって何とか普通に暮らしているだけだし。今さら魔王家なんて意味がないんだ。父さんは俺が跡を継ぐことを期待してるけど、俺が跡を継いだって何の意味も……」

「黙りなさい、紫苑！」

素直に言葉を失う紫苑に、萌黄は正面切って啖呵を切った。

「あんたは何もわかってない。意味がないなんて言わないでよ！」

泣き出しそうだった。萌黄はがむしゃらになってベランダからリビングに戻った。それでも、どこにも逃げ場なんてなくて、洗面台で顔を洗ってごまかすしか自分を保てそうになかった。

意味がないって、そんなこと、言っちゃったらあたしたちおしまいじゃない。

翌朝は相変わらずスタートリガーのエンディングテーマで目覚めた。しかしテレビの前には誰もいない。スタートリガーの戦いぶりを報告する姿はない。慣れぬスーツを着て怠けている姿もない。見回してみても、弁当を詰め込んでいる棗の後姿しかない。

行ってしまったんだ。

テレビの電源を切って、萌黄は立ち上がり重いため息を吐いた。

第十三話　稲妻家の決断（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
次回からは魔界編になる予定ですので、中心キャラが萌黄から紫苑に変わります。あくまで予定ですが……。
しばらく後にここまでのまとめを書くので、そちらもご参考ください。

the introductory chapter. 一章のまとめ（前書き

第一話から第十三話までのまとめです。

the introductory chapter.　一章のまとめ

☆★　第十三話現在のあらすじ　★☆

三年前魔王一家は、反旗を掲げた大臣と彼に雇われた勇者四人衆によって魔界から追放された。そして今は科学の世界・現界で暮らしていた。

中学三年生の長女・萌黄も三年間平和に過ごしてきたが、転校生・千臣篤志が現れ事態は一変する。千臣は魔王家を追って現界にやってきた勇者四人衆の一角・戦士一族の一人だったのだ。さらに萌黄の弟・紫苑のクラスにも魔女一族である金馬嬢子も現れ、魔王の血を狙っていることを告げるのだった。

母・棗が暴走して家出したり、周りのことを気に掛けない千臣と嬢子によって学校中が眠らされる事件が起きて僧侶一族・松陵圭太の協力もあって解決したりと様々な騒ぎに巻き込まれる萌黄。

勇者四人衆の強引な手段にいても立ってもいられなくなった父かつ魔王である鬼灯は、学校の参観日に参加。ドッジボール大会で千臣に敗れ、怒り任せに鬼灯はさっそく千臣を抑えにかかる。だがあと少しというところで逃げられる。追い討ちしようとしたところ、鬼灯の魔術は発動しなかった。

魔王が魔術を使えないという最悪の事態に、鬼灯は危険を承知で魔界に戻ると言い出した。道連れにされる紫苑が納得できないまま、萌黄と棗を残して、鬼灯と紫苑は魔界へ戻っていった。

☆★　第十三話現在の登場人物紹介　★☆

◆　稲妻家（魔王家）……かつて魔界を治めていた魔王一家。現在はクーデターに遭い追放中。

・　稲妻　萌黄　／　Ｍｏｅｋｉ　Ｉｎａｚｕｍａ　／　普通の中学三年生として暮らしているが、実は魔王家の長女。しっかり者で家庭内唯一の常識人。使用魔術は時間魔術「不順（ストイム）なる時」。

・　稲妻　紫苑　／　Ｓｈｉｏｎ　Ｉｎａｚｕｍａ　／　萌黄の弟の中学二年生。次期魔王候補である魔王子だが、本人は魔王家に絶望している。ヒーロー特撮「スタートリガー」を欠かさず見ている。使用魔術は空間魔術「空想（アピス）」。

・　稲妻　鬼灯　／　Ｈｏｈｚｕｋｉ　Ｉｎａｚｕｍａ　／　わがままな性格のせいで就職に失敗し続けて無職の父親。魔界では魔王として支配を続けていたが、現在は追放の身。身体スペックはかなり高いが、今は魔術を扱えない窮地に立っている。

・　稲妻　棗　／　Ｎａｔｓｕｍｅ　Ｉｎａｚｕｍａ　／　夫の代わりに一家を支えている大黒柱の母親。魔王妃でありながら商人の生まれのため、経済面に対してとても厳しく、たまに暴走してしまう。だが普段は家族を温かく守っている。

◆　勇者四人衆　……大臣に雇われてクーデターを実行した四つの一族。現在魔王家を追っている。

・千臣　篤志　／　Ａｔｓｕｓｈｉ　Ｓｅｎｓｈｉｎ　／　かつて魔界で魔王追放を行った勇者四人衆の一角・戦士一族の少年。萌黄のクラスに転校してくる。女子に圧倒的人気を誇る。魔術を無効化する「鬼の紅剣」を所持している。

・金馬　嬢子　／　Ｊｏｋｏ　Ｋａｎｅｕｍａ　／　父は魔王追放を首謀した大臣、母は魔女一族の少女。紫苑のクラスに転校してくる。なぜか紫苑に惚れ込んでいて、紫苑の恋人と自称している。

・松陵　圭太　／　Ｋｅｉｔａ　Ｓｈｏｒｙｏ　／　神様のお告げに忠実な僧侶一族の少年。関西弁を話し、調子のいい性格で、神様のお告げのためならひたすら空気を読まない。

the introductory chapter. 一章のまとめ（後書き）

これからは魔界編に突入すると思います。
拙い文章ですが、これからも宜しくお願いします。

第十四話　三年後の世界（前書き）

五日ぶりの第二章・十四話です。
遅れましたが、一万アクセスを突破いたしておりました。
ご覧いただいた方、ありがとうございます！
これからも宜しくお願いいたします。

追伸：評価していただいた方、ありがとうございます！

第十四話　三年後の世界

「紫苑行くぞ、魔王城の近くに行け」
紫苑が叩き起こされたのは、まだ外も明るんでいない午前三時のことだった。鬼灯はきっと寝ていなかったのだろう、でなければこんな時間に目が覚めるわけないのだ。何を言われているのかなかなか判読できない頭を無理に起こして、紫苑はふらつきながら布団の上に座った。
萌黄も棗も起きてはいないようだった。
「今から行くの……？　母さんと萌黄に何も言わずに行くってこと？」
「そうだ。見送りの言葉など胸につっかえるだけだからな」
声を消すような鬼灯の言葉こそ、紫苑の胸を突いていた。昨日萌黄を怒らせてしまって以来、言葉も交わしていなかったのだ。謝りたいと思っているのに、言えずに昨日を過ごしてしまっている。
安らかに眠る彼女の寝顔がとても憎たらしかった。
「――わかった、行くよ。でも魔王城の近くって、具体的にどこに行けばいい？」
「中央大通りの……記念公園で構わん。お前も想像できる場所だろうし、この時間公園には誰もいないはずだ」
記念公園は紫苑も幼いころから通っていた、子供向け遊具つきの広場で、何が記念なのか結局誰も知らない公園として有名だった。三年経って多少の変化はあるだろうが、その場所が消えさえしていなければ問題なく空間移動できるだろう。
鬼灯の腕を掴んで、紫苑は瞳を閉じた。そして空想（アビス）は発動した。

＊

科学の世界・現界における魔界の想像図と、実際の魔界とはおそらく大きな違いが存在するだろう。紫苑たちが住んでいた魔界は、一見現界とは大した差はない。大きな差といえば、魔界には魔術が存在すること、最先端科学が存在しないこと、数年前まで絶対王政が敷かれていたことぐらいである。

だから、記念公園だからといって珍しいものは一つもない。

「で、これからどうするつもり？」

鬼灯の腕を放すなり、紫苑はため息混じりに鬼灯の顔を見上げた。

「一旦魔王城に帰るぞ」

当たり前と言いたげに鬼灯は紫苑を放って公園出口へ歩き出してしまった。放っておいてはまずい。反射的に紫苑はその背を追いかけた。

「我が物顔で歩いちゃ駄目だって、しかも堂々と公園のど真ん中を突っ切って――」

「何を焦る必要がある、紫苑。魔界は私の世界なのだぞ」

「それ三年前までね。今はいつ殺されるかわからないんだ。ちょっとは慎重とか緊張とか考えて――」

「シンチョウだのキンチョウだの……私には『チョウ』は必要ない。それにいつ殺されるかなんて心配する必要もない。私は史上最強の魔王なのだぞ、凡人がいくら束になってきたところで、私には蚊が大群で襲ってくるようにしか思えん」

「それは酷い目に遭うだろうけどなあ。あと父さんは今、魔術を使えな――」

「紫苑、何でもかんでも魔術を頼るな。普通蚊を退治するために魔術を使うか？　労力を無駄にすることぐらいお前でもわかるだろ。必要なのは殺虫スプレーだ」

「いや、確かにそうだけど。でもそれ、相手が人間だったら――」

「気にするな、ともかく魔王城に帰るぞ。今の時間帯だったら顔を

見られずにやり過ごせるだろ。それに今となっては魔王城もただの廃墟だろうから誰も居らんはずだ」
すべての主張を一刀両断され、結局紫苑は身勝手な鬼灯についていくしかなかった。
中央大通りに出ても、鬼灯の言うとおり人の気配はほとんどなかった。あると言っても新聞配達をしている魔術仕掛けのフクロウが羽ばたく音ぐらいだ。
これなら大丈夫かな。
安心していた紫苑の目の前に何かが覆いかぶさって、視界が真っ暗になった。
「うわっ！」
「何をやっているんだ紫苑。新聞一つで慌てるな」
呆れた様子で鬼灯は紫苑の上に乗っかっていた新聞紙をめくり上げた。どうやらフクロウの落とし物らしい。とはいえ一瞬状況が読めなかった紫苑は全身冷や汗だらけである。だというのに、鬼灯は摘み上げた新聞の方に興味があったらしい。
「今朝の新聞か」
鬼灯が目を通しているから、紫苑も一応顔を覗かせて新聞を読む。現在の魔界の様子などまったく知らないのだから、ちょうどいい機会でもあった。
しばし、沈黙。
刹那、新聞は紙吹雪のごとくビリビリに破られてしまった。
「ふざけるな、あの反逆者が二期連続大統領に就任だと……！？」
「大声出さないでってば」
「納得いかん、金馬の奴め調子に乗るのも今のうちだ。今に私がこの世界を取り戻してくれる。行くぞ紫苑！」
「だから大声はやめてよ……って聞いてないな」
忠告など一切通用しない。鬼灯は魔王城を臨む中央大通りを駆け抜けていってしまった。さっさと空想（アピス）で後を追いかけるべきだと、紫苑は身体を動かそうとした。だがその心意気は急に力が抜けたよ

うに消えうせた。
例の大臣が二期連続大統領に就任したということは、三年前と置かれた状況は大して変わっていないということだ。
それなのに、堂々と魔王城に帰ることなんてできるのだろうか。
無理に決まってるよ、父さんの馬鹿。
一番いい方法は一度鬼灯ごと現界に連れ帰ることだ。現界での状況も酷いが、ここで命を捨てるよりもきっと希望もあるはずだ。
紫苑は一歩を踏み出した。と、同時だった。
「見つけましたよ、紫苑さま！」
空の上から少女が降ってきて、紫苑の上に跨(またが)っていた。

第十四話　三年後の世界（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
では、次回はいつになるのかわかりませんが、気長にお付き合いください。

第十五話　囚われの魔王子

「まさかこんなところで出逢えるなんて、やっぱり私たち運命なんですね！」

身体が急に横倒しにされたこととと、不意に少女が降ってきたこと、自分の上に落ちてきたこととと、そしてその少女が例のツインテール少女・嬢子だったこと。そのすべてが紫苑の思考回路をフリーズさせた。手に持っていた箒を投げ捨てて、嬢子は動かない紫苑の身体をぐいと引き寄せ、抱きついた。

「これで私たちは永遠に結ばれるんです……」

「離せ、って」

ようやく我に返った紫苑は嬢子を引き離そうとしたがなかなか離れない。まるで瞬間接着剤にくっつかれているような粘着力だ。これだけ密着されては、空想（アビス）を発動したとしても彼女ごと移動してしまう。

「何でこんなところにいるんだよ」

「それはこっちの台詞ですよ。まあ幸運だったんですけど。あなたのお父上に実質負けて以来、私たち実力不足を痛感したんです。特に篤志君は自分を追い詰めるところあるからなおさらね。だから魔界（こっち）に帰って修行することに決めてたんですよ」

「なんであんたたち魔界に帰れるんだよ？　現界から魔界への移動は原則禁止されてるはずじゃ……」

「私は大統領の娘ですから、特別に許可を出してもらえるんですよねー」

特別の部分を心なしか強調して、嬢子は無垢な声で囁いた。余裕がある彼女とは違って、紫苑はずっと崖っぷちに追い詰められているようだった。前しか見えていないのだろう父親は助けに来る気配がない。

「どうでもいいけどわかったから離して……」

「え、どうでもいいんですか？」
「ああ、どうでもいいね！」
「どうでもいいなんて、紫苑さまってば何にもわかってないんですね。私の機嫌を損なえば、どうなるかわかってないでしょう？　こんなところに魔王陛下がいらっしゃるなんて普通見逃されるものじゃないんですよ。私が誰かに――例えば私の父上に話したりなんかすれば、取り囲まれてしまいますよ。あなただけでなくあなたのお父上も。魔王陛下といえども大群に囲まれたら十分もせぬ間に殺されちゃいます、三年前のように。今度こそお父上を守りたいのなら、おとなしく私の言うことを聞いてくださります？」
　緩やかに言いながらも嬢子は明らかに紫苑を脅していた。相手のペースに飲まれてはいけないと頭の中ではわかっているのに、鬼灯のことを持ち上げられては何も口答えできなくなる。あんな父親でも、いやあんな父親だからこそ自分が守ってあげないといけない。そんな気持ちがすっとよぎっていた。
「……何を」
「はい？」
「何をさせるつもりだよ」
「その気になってくれましたの？　簡単なことです、私と空の上でデートして下さい！」
　まじまじと見つめる彼女の表情はいたって真剣だ。だから余計にますます馬鹿馬鹿しくなってしまった。
「デート？」
「はい！　私の箒に二人で乗って月夜の下でデートするんです。すごくロマンチックだと思いません？」
「月夜って言うかもう明朝なんだけどな……」
「構いません、愛は時間を越えるんです！　だからほらこの箒に掴まって下さい」
　投げ捨てられていた箒を鷲づかみにして嬢子は先に跨った。デートとか言って実は誘拐しようとしているんじゃないだろうか。嬢子

に乗せられるがまま渋々紫苑は彼女の後ろに乗った。そして不意に箒は生きているかのように空へ浮かび上がっていった。

＊

「いくんだ〜！　スターショット！　やるんだ〜！　ブレイブトリガー！　そしてとどめの〜、いちげきひっさつ・ブレイブスターキック！　まってろまおう〜、そのうちおまえをねらいうちぃ〜♪」

太陽の光にぼやかされた月夜の下で、嬢子は上機嫌に歌っていた。時は午前三時半前、街が眠りについているというのに、彼女はいつになくテンションが高い。その原因である紫苑はもはやぐったりとした様子で彼女の背中を睨んでいた。気づいた嬢子は歌をやめて後ろ向きに座り変えた。

「どうかしたんですか？　私、紫苑さまのためにスタートリガーのテーマ覚えたんですよ？」

「う……歌はどっちでもいいんだ」

「どっちでもいいって、ちょっとがっかりじゃないですか」

「あ、いや、気に障ったんなら謝る……けど。その代わりデートは終わりに……」

「あれ、ちょっと紫苑さま何か顔色悪いです！　病気だったんですか！？　私ったら喜びのあまり暴走しちゃった……ごめんなさい、今から病院に連れて行きます、医者もみんな叩き起こしてあなたの治療に当たらせます、だからそれまでは……！」

「う、いや、違うんだ。箒から降ろしてくれるだけでいい」

「え、私の隣が嫌とかそういうことなの――」

「だから、俺は高所恐怖症なんだよ！」

地上百メートルの箒の上で紫苑は思い切り叫んでいた。青ざめた嬢子は声も出ずに口だけ「嘘……」と動かしている。叫ぶのに百二

十パーセントの力を使い果たし、いつの間にか紫苑は興奮のあまり気を失ってしまっていた。

何でこんな目に遭わなきゃいけないんだ。

必死に抱きかかえる嬢子の声が鼓膜を揺るがす中、紫苑は父親のことをすっかり忘れてしまっていた。

第十五話　囚われの魔王子（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
では、次回はいつになるのかわかりませんが、気長にお付き合いください。

第十六話　謎の侵入者（前書き）

今日二回目の投稿となります、十六話です。

第十六話　謎の侵入者

紫苑が目覚めた先にはあの暗がりの空はなくて、ぼんやりと浮かぶ丸い電灯があった。

「うわあ、ここは、どこなんだよ！」

布団の上に寝ていたらしい紫苑は目を見開いて、まだ眠ったままの身体を起こした。外からは朝の日差しがゆったりと流れ込んでいる。部屋の中には、筆で何か書いてある掛け軸、色とりどりの生け花、畳の匂い。旅館と見間違う、広々とした立派な和室がそこには広がっていた。

「慌てないで、ここは私の家です、紫苑さま」

背中から声がした。まさか、と紫苑が恐る恐る振り返ると、やはり嬢子の姿があった。しかも、紫苑が寝ていた同じ布団に包(くる)まっている。

女遊びの一つや二つ、そろそろ始めるころだと思っていたの。

悪ふざけした母の言葉が今まざまざと蘇ってくる。紫苑の動揺も知ることなく、隣で寝ていた嬢子はようやく布団から抜け出した。その表情は意味深に屈託のない笑顔だ。

「よかった、お元気そうでよかったです」

「あんた俺の横で何やって……っていうか何でこんなところに連れてきたんだよ、約束が違うだろ！」

「約束って何のことです」

「惚けても無駄だよ、あんたは言うことさえ聞けば大統領に話さないって言ったはずじゃないか」

「確かに言いましたよ」

「なら何でこんなところに……大統領に俺のこと知られるに決まってるだろ」

「知られません。それに紫苑さまは自分の身も惜しまずに素直に言うことを聞いてくださりましたから、父上にも申し上げておりませ

んよ」
「いずれにせよこんなところにいたら絶対知られる」
「だから、知られませんって」
「ごまかさなくてもわかってるよ、ここは大統領の家なんだろ？」
「違います、何を勘違いなされてるんです？」
嬢子は何気なく首を傾げているだけだった。
「え、今さっきあんた、ここは私の家って言ったじゃないか」
「ええ、私の家です。あ、それで勘違いしたんですね。これは私の家であって父上の家ではありません、父上の家はもっと立派な公邸ですもの。ここは父上から誕生日にもらった私だけの家です。だからそんなにたびたび父上が来ることはありませんよ。だからご心配なく」
柔和な笑顔が妙に心臓をつついていた。
とはいえ魔女一族である嬢子の家に踏み込んでしまっている。理由などは関係ない。その事実が一番の問題だ。逃げるべきか逃げないべきか。逃げるのは簡単だがその先に何が起こるかわからない。逆に素直に敵の拠点である場所にいるのもどうかと思う。
外出（デート）はもってのほか。
嬢子もこれ以上は要求してきたりはしないだろう。もし空の上のデート・リターンズでもされたら、あたり構わず逃げ出してしまうに違いない。
「紫苑さま、私ちょっと朝ご飯持ってきますね」
「そこまで厄介になる気はないよ」
これでは夫婦のやりとりみたいじゃないか。軽く遠慮しながら紫苑は内心断固拒否だった。
「お気になさらず。台所に置いてきてありますから持ってきますね」
お節介にも程があるというのに、それが当然と言わんばかりに嬢子は長い渡り廊下を走っていった。気づけば早くもばたばたという足音が消えている。
空気が抜ける風船のように、紫苑はため息を吐いた。

彼女に見つかる前に逃げ去るなら今しかない。わかっているのに、紫苑は伸びをするだけで立ち上がろうとはしなかった。父を放って現界に帰るわけにもいかないし、今から魔界のどこかへ逃げたところで誰かに見つかるのは見えきったことだ。それならば夜まで嬢子の言うことに従ってこの家に潜伏したほうが安全だ。

そうしよう。

結論を出し、伸びを終えた紫苑は嬢子の帰ってくるであろう渡り廊下の方を眺めていた。だが帰ってこない。どれだけ広い家なんだろうと紫苑がぼんやり考えていたときだった。

「あ、大丈夫みたいね？」

頭上に響いたのは高い少女の声だった。とはいえ嬢子の声ではない。嬢子の声よりもしっかりしていて一気に脳まで届く声だった。

呼吸が止まる思いで振り返った。誰もいない。心臓の鼓動が耳にまで聞こえてくる。

気配を感じてもう一度振り返った。

「君って嬢子に誘拐されてるんだよね？　ホント災難だっただろうけど、もーぅ大丈夫、正義の味方の輝（きらら）がちゃちゃっと助けてあげるからね！」

パーマをあてた長い黒髪が印象的な、背の高い少女がそこに立っていた。初対面だというのに彼女は親愛感を持った笑みを満面に浮かべている。

いつでも逃げられるように彼女から距離を離し、紫苑は壁に張り付いていた。

「あ、んた、誰だよ……！」

「ありゃー、輝って嫌われてたりする訳？　えー、がっかりしちゃう」

「だから、誰だって聞いてるだろ……！」

「んーもう、助けてあげてるってのにその態度？　ホント嫌ね、最近のガキンチョは。まあいいわ、教えてあげる。嬢子が本気で嫌いな人間ナンバーワンの輝ちゃん。嬢子ってば次から次へと彼氏作ろ

うとする悪い奴なんだよねぇ、だから輝が勝手に別れさせてやるんだー。わかるかな、ガキンチョ君」
「わかるわけないだろ。結局あんたは俺の敵ってこと……？」
「全っ然わかってないじゃん！　輝は嬢子の敵で君の味方、そう言えばわかる？　そうだなあ、もっと簡単に言うと、輝が嬢子をちょちょいって騙してくるから君は逃げればいいの。わかるかな、ガキンチョ君？」

第十六話　謎の侵入者（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
では、次回はいつになるかわかりませんが、気長にお付き合いください。

第十七話　一日遅れの再会

「ガキンチョガキンチョって……俺にだって名前ぐらいあるんだけど」

紫苑は壁から剥がれて、代わりに腰に手を当てて吹っ切れた。この輝とか何とか言う彼女はとりあえずわかりやすい性格のようだし、口先だけかもしれないが逃げさせてくれるというのだから。それにそのうち嬢子も帰ってくるはず、脅える心配はなさそうだった。逆に紫苑としてはなめられることが気に食わなかった。

当の本人も人様の家（しかも畳の上の土足）ですっかりくつろいでしまっている。

「名前？　君にも名前なんてあるの？」

「あんたにだってあるんだし……当たり前だろ」

「ふーん、何ていう名前なの？」

「……俺のこと知らないってこと？」

魔王子として魔界では名も顔も知られているはずである。しかし彼女は馬鹿にしたような声を上げた。

「なあに驚いちゃってんの？　君の名前なんて輝が知るわけないじゃん。輝と君は初対面、見たこともなけりゃ聞いたこともなけりゃあ、知らないに決まってるでしょ。もしかして君は、世界は自分で回ってるとか思ってたりする訳？」

話がよく飛躍するな。冷めた視線を飛ばしていた紫苑だったが、それは目だけが勝手に働いているだけだ。実際は迷いに迷っていた。名を名乗るべきか否か――もちろん否だが、この輝とかいう少女の習性からすると否のままで抜け出せそうにない。名を吐くまで問われるのが落ちだ。

「それってあんたのことじゃないか。俺はそんな人間じゃない」

「じゃあ君は何者なのかなあ、ガキンチョ君」

迫る影。上がった口角。細めた目。笑っているがあの中身はどう考えても悪魔だ。生きたまま殺されているようにさえ思える圧迫感がそこにある。
「――か」
「か？」
「金馬嬢子が来るんじゃないの、早くしないと？」
「あ、そっち期待してた訳？　嬢子ならしばらく来ないわよー、ここに来る前にじっくり眠らせておいたからねえ。話ごまかしても駄ぁ目、輝は名乗ったんだから次は君の番。わかるよね、ガキンチョ君」
突破口はない、逃げることは許されないのだ。嬢子とは違う意味で鬱陶しい相手だ。
仕方ない、紫苑は大人しく輝に対峙した。そして思いつく限りのフルネームを口走った。
「俺の名前は……綺羅野双星（きらのそうせい）」
「きらの、そうせい？」
輝は純粋に首を傾げている。
魔界の人間なら基本的に知らないだろうと言い切ってしまったが、まさかスタートリガーの主人公の名前だとは言えない。しかも作り物だとわかりやすい名前。さすがに紫苑も赤面しながら、輝の答えを待つしかなかった。
しかし彼女の答えは、紫苑の予想を大きく上回った。
「カッコいい名前じゃない！」
「カッコ、いい？」
「なんか、聞こえが輝と似てるし。隠すことなんてないのに……いい名前だと思うよ。んじゃ双星君は逃げちゃってちょうだい。そろそろ嬢子に仕掛けた麻酔も切れちゃうだろうから、輝は嬢子を言いくるめに戻るねー。ってことでグッドラック！」
言いたいことだけ言って、輝は和室から軽快に飛び出し、渡り廊下を遡っていった。その動きは常人のそれではなくて、スタントの

ように手際がよく速かった。
嵐は去っていった。
それにしてもまったく輝が何をしたいのかは最後までよくわからなかったが、逃げるべきなのだろう。輝も紫苑の顔を知らなかったようだし、もしかすればもう魔界中の人々の記憶から紫苑の顔など忘れてしまっているのかもしれない。三年の月日が経ち、しかも本来こんなところにいるはずもないのだから当然といえば当然だ。
父さん、魔王城に行っちゃったかな……？
一抹の不安がよぎる中、紫苑はひとまず記念公園に空間転移した。

＊

記念公園の前に広がる中央大通りを突き当たりまで西に抜ければ、魔王城に辿り着く。現界でいうタクシーにあたる、魔法仕掛けの馬を借りれば十分もせぬ間に到着するのだが、それを借りる金もなければ目立つわけにも行かない。結局紫苑は中央大通りに沿って歩いていくしかなかった。
中央大通りは景観保護地区であり、レンガ造りのアパートとその一階部分にある店舗が軒並み連ねている区域である。魔界の中でも屈指の観光スポットで、各地点々とする遺産を見て、魔界城を観覧したのちここで買い物をするのが定番コースとなっていた。今日もこんな観光客たちが朝から群れあがっている。
オープンカフェレストランの前を通りすがっていると、ざわめきの中から声が聞こえた。
「……おん、紫苑、紫苑ここだ！」
一番西側の席から聞き覚えのある声がする。慌てて人々を掻き分けた先には、この世界から追放されているはずの魔王様が優雅にカフェタイムを楽しんでいた。どこで拾ってきたのかは知らないサン

グラスで変装しているらしい。が、紫苑はそんなことにまで考えが及べなかった。
「なんでカフェしてるんだよ、魔王城に行ったんじゃなかったの？」
「勝手にどこかに行ったお前を探していたんだ、紫苑」
「矛盾にも程あるよ、その様子じゃあね」
「休憩だ休憩、腹が減っては戦はできんだろう」
「……じゃあ魔王城にはまだ行ってなかったんだね」
安心したのやら、何なのやら。カフェラテの実に香ばしい香りが、紫苑の心をチクチクといたぶっていた。

第十七話　一日遅れの再会（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
では、次回もいつになるかわかりませんが、気長にお付き合いください。

第十八話　父さんの危篤

「よく今までその格好でやり過ごせたね」
「ああ、何度かバレそうにはなったけどな、言い逃れは『よく似てるって言われる』の一言でばっちりだ。誰も本物の魔王だと気づいた者は居らんぞ。本当に愚かな市民どもだ」
「確かに父さんまで都合がいいなんておかしいよね――」
「ん、どうかしたのか紫苑？」
「何にもわかってない平和な父さんは知らないだろうけど、俺昨日誘拐されてたんだ」
　紫苑は嬢子と輝に出逢い、起こった出来事をかいつまんで説明した。終始言葉を挟まなかった鬼灯だったが、紫苑の話の区切りがつくと生真面目にテーブルを叩き付けた。
「どこまでも私を挑発しに掛かるつもりだな……」
「あの輝って子が金馬嬢子を押さえててくれるって言ってたけど、あの様子じゃ期待できない。いずれ金馬嬢子が大統領に口出ししそうだし、もう時間は掛けられないよ」
「ああ、面倒なことになる前にさっさと終わらせよう。人混みを避けて空想（アビス）で直行するぞ」
　カフェラテを全部飲み終えないまま、鬼灯は席を立った。かと思うと角を曲がり裏道に入っていってしまった。
「ああもう……なんであんなに周りを見ずに行動しちゃうかな。これじゃ本当に見つかっても仕方ないじゃん」
「うんうん、そんなの当たり前だよねえ？」
　後ろを見るわけにはいかなかった。幻聴かと思った。だが間違いなく少女の声は聞こえた。
　口が、少女の手によって塞がれている。波打った黒髪が肩に掛かっている。

「本当に甘いよねえ、魔王家の人間ってさ。自分たちの都合のいいことばっかり信じちゃって。あんまり簡単に信じちゃうから輝もやりやすかったよ？　輝が君の正体知らないわけないのにね、綺羅野双星だっけ、変わった名前名乗っちゃって？」

人混みがあっという間に紫苑と輝の周りを取り囲み始める。このままじっとしていれば間違いなく政府直属軍隊が現れ、身柄が拘束される。迷わなかった。

紫苑は輝ごと、ビルの二階の窓の奥を想像した。

「うわん、何ここー？」

二人はオープンカフェがあるアパートの二階部分に現れていた。誰も住んでいない空き部屋のようだった。輝の腕を振り払い、二メートルほど距離を取ると、紫苑は聞いておかなければならないことを思わず口走っていた。

「あんた一体何なんだよ！」

「何って……本当に輝のことわかってないの？　もう面倒ねー、簡単に言ってしまえば輝は逃げる君に発信器を仕掛けたの。それで、魔王様の居場所を発見できました。それだけのことなのよ」

「じゃあ、あんたが俺を金馬嬢子の家から逃がしたのって……」

「当たり前でしょ、釣りで大物を釣りたいときと同じよ。君みたいな小さな餌をつけておけば、いずれ大物に引っかかってくれる。案の定簡単に引っかかってくれたけどねえ」

「あんた……」

「ありゃ、君ってば最後まで言わせる訳？　輝の本名は都束輝（とぞくきらら）。つまり、勇者四人衆の一つで盗みと騙しを司る、盗賊一族なんだよ？

輝はずうっと君を騙し続けたってこと、世の中ってのは甘くないよー。わかるかな、ガキンチョ君？」

「今までのことは全部嘘だってこと？」

「あー、それは誤解かもなあ。全部じゃないよ。全部騙したら嘘だってバレバレじゃん。最低君に話したことで嘘じゃないことは、輝は嬢子のこと大嫌いってことかな？　だあって嬢子ってば甘いんだ

もん、君のこと大好きすぎて守っちゃってるんだもん。盗賊一族はもたもたするの大嫌いなんだよね、だから輝はこんな手荒な手段使ったんだよねー」
輝の御託の後半はもはや聞いてはいなかった。大通りに面している出窓をとっさに掴み窓を開いた。真下を見れば、もう軍隊の数隊は集まり始めていてさらに群れあがった群集を諌めている。向かいのビルの壁に鬼灯の姿があった。
「うわお、魔王様絶体絶命って感じ？」
「嘘だ、父さん……！」
何十もの銃弾を身体に浴びた鬼灯がそこに倒れていた。すでに意識はないようだった。さらになお三十人ほどが周囲を包囲し、いつ起き上がってきても波状攻撃が仕掛けられるよう構えている。
「あーあ、ありゃもう無理かもねえ。手っ取り早く治療してやんないとマジで死んじゃうかもね？」
「行かなきゃ……！」
「そんな震えた君が行ったって意味ないと思うけどね。まー好きにしなさいよ、もしかしたら助けられるかもしれないし、ねえ？」
一秒も掛けてはいられない。瞬き一つの間に、二つの場所を想像しなければならない。それが間に合わなければそれは死を意味する。
精神は今もがたがたに揺らいでいる。
「行くんだ……！」
「そ。行ってらっしゃい。死んでも輝を恨まないでね」
あまりに情のない輝の声がさらに気をかき回してくる。嫌な想像が頭の中を何度も巡り続けている。
それでも、行かなければならなかった。

第十八話　父さんの危篤（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
最近遅れがちですね……すいません。
では、次回もいつになるのかわかりませんが、気長にお付き合いください。

第十九話　立腹のエリザベス

そこから後の紫苑の記憶は鮮明に残ってはいない。
決死の覚悟で死に瀕している鬼灯の元へ渡り、数々の叫び声や罵声、飛び交う銃声を耳にして――考えたくもないことが脳裏を駆け巡り、震える頬に自然と流れる涙を感じ、他に何も聞こえなくなるくらい叫んで――その場から消えていた。
逃げてばっかりだね。
もっと強かったらよかったのに、そうしたら皆を守れるのに。こんな思いさせることもなくて、傷つけさせることもなかったんだ。
ごめん。
「――さん！」
声がする。萌黄の声だ。ちゃんと家に帰ってこれたようだ。
「嘘でしょ、父さん、父さん！？」
ぼんやりした視界の先に、萌黄がいる。制服姿だ。必死に、隣で叫んでいる。真っ青な顔で、ずっと喉から搾り出したような悲痛な叫び声を上げている。何も言えない空気が広がる中、紫苑はむくりと身体を起こした。
「……萌黄」
「紫苑、これ、どういうことなの！？　何で父さんがこんなことに……」
寄りかかる萌黄の歪んだ瞳が迫ってくる。肩を掴まれ人形同然に揺さぶられても、ただ紫苑は不安定な呼吸を返すことしかできない。
「黙ってないで答えてよ、馬鹿！」
萌黄に加減なく床に叩きつけられても、紫苑の感覚は未だ戻ることはなかった。恐怖がまだ神経の中を徘徊しているようだった。
棗に電話しているであろう萌黄の声だけが沈黙の世界に広がっていく。

「母さん早く帰ってきて、父さんが、父さんが……！」
それだけ伝えて電話を終えた萌黄はぺたんと床に崩れ落ちてしまった。その様子を何も考えずに見つめていると、急に萌黄は呟いた。
「もしかして、あんたのせいだったりするの？」
その声は実に暗い。
「何か言いなさいよ、あたしの言ってること合ってるの？　間違ってるの？　答えなさいよ」
「俺のせいじゃ、ない……」
「じゃあ何があったの？　あんた、知ってるんでしょ」
「知って何になるんだよ……」
「知らないといけないでしょ、こんな状況だったら！」
「知ったって意味ないよ……だって、もう、無理だよ。やっぱり殺されるんだ。いつになったって、変わりはしないよ。勝てないのに勝負を挑むだけ無駄なんだよ、勝てないなら最初から諦めておけばいいんだ……」
「無理、って。無駄ってあんた……」
そこから言葉は断ち切られてしまった。あるのはフローリングの上に紅を流している父の姿のみ。
しっかりと見つめることなんて、できない。
今にも意識が飛んでしまいそうな中、甘い猫の鳴き声が耳に流れ込んでくる。どこかの野良猫が、ミルクを求めて鳴いているような声。緊張の糸がぐいぐい引っ張りこまれているような高音で。
耳障りな鳴き声はやがて人間に理解できる言葉に変わっていく。
「――この弱虫、重いって言ってるだろ！」
激昂している。
狼狽した紫苑が咄嗟にその場を離れると、その真下には今にも潰れてしまいそうな白く長い毛並みの猫が倒れていた。わけもわからず紫苑と萌黄が目を合わせていると、その白猫は生き返ったように飛び起きた。その蒼の瞳は獲物を見つけた猛獣のように輝き、全身の毛を逆立てて怒りを露骨にしている。

「よっくもあたいの身体を踏みつけやがったな！　たかが人間ごときがあたいの毛を乱すなど千年早いってんだよ！」
「あの、あんたってどなた様？」
紫苑も浮かんだ当たり前の疑問を萌黄が声にした。しかしその質問をするや否や、白猫は今にも飛び掛ってきそうな構えを見せはじめた。
「あんた、だと？　ふざけんじゃねえ、このエリザベス様をあんた呼ばわりするとは千年どころか一万年早いってんだ、わかるか……いやわかんねえんだろうな」
「え、エリザベスって母さんが前に言ってた――」
「てめえ！　まだわかんねえのか、あたいはエリザベス様だ！　ちゃんと様をつけやがれ」
機嫌の悪い猫と機嫌の悪い少女を混ぜ合わせたような声で白猫エリザベスは鳴き続けている。まるで鬼灯の普段の言動そのものだ。二人を放って一人独走するエリザベスは、銃弾を身体中に浴びた鬼灯の姿を目にするなり、そこに腰を下ろした。
「こりゃひでえな……あのクーデターの時よりもひでえ。もしかしたら棗まで道連れにしてしまうかもしれねえぐらいの重傷だ。その割には息はあんのかよ、信じらんねえ程しぶとい奴だな。とはいえいつまで持つかは鬼灯に残ってる魔力次第かねえ」
「え、エリザベス、父さんは今魔術を使えないの。何でかわからないんだけど」
「魔術を使えない、だと？　馬鹿言え、何でもかんでも魔術でぶっ壊すのが趣味の鬼灯が、魔術を使えないだと？　奇妙なこともあるもんだな」
「だから母さんはエリザベスから預けておいた魔力を返してもらえば、魔術を使えるようになるとは言ってた」
「あたいから魔力を返してもらう？　何だよこいつ、そんな最悪の状態になってんのかよ？　そりゃ駄目だ、鬼灯の命はすぐ枯れるな」
白猫は弓なりに身体を逸らし、大きく伸びをした。

「仕方ねえな、あたいが預かってる魔力を少しだけ返してやるよ。
そうすればもしかしたら助かるかも知れねえしな……」

第十九話　立腹のエリザベス（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
では、次回もいつになるのかわかりませんが、気長にお付き合いください。

第二十話　突然の来訪客

呼び出し鈴なしに棗が帰宅したのはそれからまもなくのことだった。夫の無残な姿に、卒倒しそうなくらい取り乱していたが、エリザベスの無鉄砲な慰めでほんの少しだけ落ち着きを取り戻していた。

「何でいるのかわからないけど……エリザベス、協力して」

言いながら棗は鬼灯の身体を抱えあげて、寝室に運び入れ始めた。白猫もその足跡をなぞるように後をつけていく。

「紫苑坊やが空想を使うタイミングと、二人の噂を聞いたあたいが鬼灯のところに到着したのとが偶然一致しただけだ。そんな偶然呼び寄せるなんて、本当強運もってやがるな鬼灯は……」

寝室に消えた一人と一匹は扉に鍵を掛けて閉め切ってしまった。これから棗は魔術を用いる気なのだろう。命あるものなら何でも再生することのできる、代々の魔王妃が受け継ぐ門外不出の魔術――それが棗の魔術「生命の鼓動（レ・フィーバ）」だった。しかしその魔術はさすがに安易なものではない。ここまで深い傷を治療するためには数々の儀式を踏み、一歩間違えれば使用者すら飲み込まれてしまう危険な術でもあった。

しかも何日も続くこととなるだろう。

「子供たち？」

襖の向こうから猫の声が聞こえる。

「うまく行きゃ鬼灯は……身体も魔力も完全に復活するぜ。だからそんなに落ち込むなってんだ。こっちまで辛気臭くなるじゃねえかよ」

「――エリザベス、ありがと」

「か、感謝なんかするんじゃねえ、あたいはそんなつもりで言ったんじゃなくて……ただ単に事実を言っただけだっ！　ああもう、もう話しかけてくるんじゃねえぞ！」

エリザベスは弾丸のように一人話したかと思いきや、あとはすっ

かり黙ってしまった。含み笑いをしている萌黄は、エリザベスのおかげで元気と希望を取り戻したようだった。それでも紫苑はまだ心に残った靄を晴らせずにいた。

「……謝ってもいい？」

改まった弟の第一声に、萌黄は苦笑いをして隣に座った。

「謝るなんて、らしくないじゃない？」

「だって、さ。萌黄にはずっと迷惑掛けてきたからさ。俺ってば男のくせにうじうじして、本当に駄目だとわかってる。このままじゃ駄目で、変わらなきゃって思ってるんだけど、やっぱり急には変われないんだね。今回のことも、父さんがあんな目に遭ったのも結局俺が発信器を仕掛けられたせいだし……」

「発信器？」

「うん、もう魔界で外してきたけどね。盗賊一族に嵌められたんだ」

「そうだったの……」

「でも変われないなんて言って逃げてられないよ……確かにどこかで逃げたがってる自分はいるよ？　だけど今、母さんと萌黄を守れるのは俺だけなんだ。だからもう後ろは向かない」

「……そう。でも、無理しちゃ駄目だからね。ずっと逃げてきたあんただもの、恐いときは甘えてもいいのよ」

「俺、もうそんなに子どもじゃない」

まだからかっている萌黄のそばを離れ、紫苑はベランダを覗き込んだ。外はオレンジ色の夕日が輪郭をくっきり残して浮かんでいる。

強くならなきゃ、皆を守れるぐらい。

――すいませーん、あのー、稲妻さーん。

声が聞こえて紫苑は玄関に振り向いた。呼び出し鈴が何度も連続で鳴り、その合間から中年の男の声が飛び込んでくる。悪戯にしてはたちが悪い、近所から苦情が来そうだ。

萌黄が玄関のドアを開けた。と、同時にその招かれざる客は玄関になだれ込み、必死にドアを叩き閉めて、床に膝をついた。

「もっと早く開けとくれよ、稲妻ぁ……隣の犬に睨まれて大変だっ

たんだからなあ……！」
　最初いったい何の化け物が飛び込んできたのかと思った。だが、萌黄は違う意味で顔を真っ青にしてその男を指差し叫んだ。
「えーーーーっ、なんでティーチャーここに来てんのよーーーっ！？」
「……あー、そんなに嫌がることはないだろう？」
　三年一組担任のメタボ中年、茶々先生（通称：ティーチャー、担当科目：音楽）だったのだ。彼はのっそりと身体を起こすなり、玄関に腰を下ろしている。汗まみれの額を服の袖で拭い、荒い息を狭い空間に吐き続けている。反射的にリビングまで逃げてきた萌黄に突き出される形で、紫苑は茶々先生に対峙した。
「あの、何の用ですか」
「あー、君は稲妻さんの弟かね？」
「二年の稲妻紫苑です。姉が何かご迷惑でも掛けましたか？」
「いやー、君のお姉さんは何も悪くはないんだがね。話があるのは君でも君のお姉さんでもなくてだな。えー、お父さんかお母さんは居られるかな。どうしても急ぎのお話があるんだがなあ」
　さすがに苦い顔をして紫苑はリビングの萌黄に目で合図を送る。萌黄がすぐに首を横に振ったのを見るなり、紫苑は不自然な笑顔を茶々先生に向け答えた。
「いえ、父は前に就いていた仕事が原因で大怪我をして入院中で……母はその看病に当たっています」
　ほぼ事実をそのまま伝えてみたが、茶々先生は眉間にしわを寄せている。
「ん？　君たちのお父さんなら二日ほど前に参観日に来られていただろう？」
「あ、あの、そのあとで怪我しちゃったみたいで」
「そうか……なら構わない。君たちに聞いてもわからないだろうしな。また今度出直すとしよう」
　まだ息も荒々しい中、茶々先生は膝をぐいと持ち上げてドアの取

っ手を引いた。後ろから萌黄のため息が聞こえたのは幻ではないだろう。だが紫苑は帰ろうとする茶々先生を呼び止めた。
「聞かせてください、何の用だったのか」
「君らにはわからんだろう」
「父に伝えておきますから」
「うーん……参観日のことでだ。小豆色の保護者と剣を持った子どもが戦っていたとか何とか、よくわからんことを妙な爺さんがしつこく言うもんでな……君たちのお父さんのことだと思って確認を取りに来たんだ。どうせ爺さんがチャンバラかなんかと勘違いしたんだろう。あんまり気にすることはないぞ」
早口に言い残して茶々先生は稲妻家を後にした。
犬が必死に吠えるのが、妙に頭に残っていた。

第二十話　突然の来訪客（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
では、次回はいつになるのかわかりませんが、気長におつきあいください。

第二十一話　母さんの歌声（前書き）

二十一話となりました。
累計アクセスが二万アクセスを突破しておりました。ありがとうございます。
これからも是非、末永くよろしくお願いします。

第二十一話　母さんの歌声

夜八時ごろになって封じられていた扉が開いた。出てきたのはエリザベス一人、表情一つ変えはせず、紫苑と萌黄が暇つぶしに見ていたテレビの前に腰を下ろしている。

「坊やも随分マシな顔になったじゃねえか」

円らな瞳と目が合うなり、エリザベスはぶっきら棒に鼻で笑った。

「何があったのかは知らねえけど、もう二度とあんな落ち込んだ顔見せんなよ。あたいがイライラしてくるんだよ」

「わかってるよ。それよりもエリザベス、母さんに付き添わなくてもいいの？」

「ああ、あたいが預かってた鬼灯の魔力の一部を、鬼灯に注いでおいたからな、当分鬼灯はもつだろ。あたいにできんのはここまでだ。あとは全部棗にかかってる」

「母さんの儀式の方はどうなった？」

エリザベスは答えなかった。答える前に、あの扉の向こうから答えが返ってきたのだ。棗の声が旋律となって部屋の奥から溢れ出てくる。聖歌のような流れるフレーズを、無伴奏でここまで歌い上げるのはプロの歌手でも難しいのではないだろうか。寂れたアパートの一室は、彼女の声で震え上がっている。

「聞いての通り、第三段階――生命の旋律に入ってる。これさえ成功すりゃ鬼灯は助かるだろうな。逆に、鬼灯の傷が戻るより先に棗の喉が枯れてしまったら、棗まで道連れだ」

「……母さんの声、綺麗だね」

「だから魔王妃になれたんだ。これほどの歌唱力がなかったとしたら、商人の家系に生まれた棗が魔王妃にはなれなかったと思うぜ。魔王妃になる最低条件の一つが、儀式のための歌を歌えることだからな。はっきり言ってお前らが生まれたのも、この歌声のおかげで

もあるんだ。感謝しとけよ」
命と命を懸けた歌声は途切れることなく続いた。一時間続き、二時間、三時間――いつしか紫苑も萌黄もテレビをつけたまま眠ってしまっていた。彼らをも癒す子守唄は留まることはなく、途中声を震わせながらも、ずっと続いた。
瞼に眩しさを感じて、紫苑は目覚めた。決意をした夕日のような輝きの朝日が昇り、玄関側の窓から強い日差しを運び入れている。
歌声は、もう聞こえていなかった。
もう大人しくしていられなかった。嫌な予感ばかり脳裏をよぎる自分を振り切って、紫苑は空想(アピス)で寝室に入り込んだ。
部屋は静かだった。いつのまにか窓は開かれ、そこから朝風が新しい空気を流している。
「母さん……？」
棗は寝室に敷かれた布団の上で気を失っていた。
そしてその傍らには、彼女の喉を氷嚢で冷やしている、父の姿があった。
「父さん……？」
「すまない、紫苑」
銃弾であけられたであろう穴だらけの紅い服。その奥にあった痛々しい姿はもはや存在していなかった。鬼灯は棗の肩に布団を掛け、紫苑に振り向いている。
「父さん、大丈夫なの！？」
「まだ身体の感覚はほとんどないが……しばらくすれば元に戻るはずだ」
「ほう、お前って本当、ゴキブリ並の生命力の持ち主だな」
鬼灯によって開けられていた、リビングに通じる扉からエリザベスは顔を出した。さらに大あくびしながら現れた彼女の背後からは、萌黄の姿もあった。
「父さん、無事なんだね！」
萌黄はためらわず鬼灯の胸に飛び込んでいった。泣きつく萌黄を

なだめながら、鬼灯はゆったりした歩調で歩み寄るエリザベスに向いている。
「エリザベス……お前こっちの世界に来ていたのだな」
「ふん、悪かったかよ。そのおかげでお前は生きてんだぜ、感謝しろよ。それよりも棗は大丈夫なんだろうな？　お前の傷を治すための身代わりになったら意味ないんだかんな！」
「彼女は無事だ。しばらく眠らせてやらんとならんが、命には問題ないはずだ……それよりもお前、久々にあったというのにその口の利き方は何だ？　会って早々喧嘩を売るとはいい度胸だな」
「はっ、お前は本当に偉そうだよな。はっきり言って子どもたちのほうがよっぽど素直でいい奴じゃねえか。それにお前はわかってねえ、さっきも言ったけどお前が生きてんのはこのエリザベス様のおかげなんだからな。それをわきまえて口を聞くようにしろよ」
「猫の分際でよくそんなことが言えるな。あとで皮を剥いでやろうか……肉はカラスにくれてやろう。私はそんな汚らわしい肉など食う趣味はないのでな、ありがたく思え」
　他者に対して常に上から目線を飛ばす二人の諍いは簡単には止まらない。止めなければならないが、紫苑はまだ止められそうになかった。やっと訪れた平安の日々なのだ。少しぐらい悪ふざけしてもいいのではないか。
　ほら、母さんだってちょっと、微笑んでるみたいだし。
　五分ほどで決着がつかないまま諍いは、鬼灯の咳払いによって強引に止められた。
「――エリザベス、母さんの世話を任せるぞ」
「何だよ偉そうに、それでお前はぐうたらするってのかよ。やってらんねえ、あたいはしないぜ、罰としてお前がするのが常識だろ」
「誰がぐうたらするか、お前ではあるまいのに。私は……もう一度戻る」
「戻るって、どこにだよ？」
「戻るって言ったら一ヶ所しかないだろう、魔界だ」

第二十一話　母さんの歌声（後書き）

と、今回はここまでです。
では、次回もいつになるのかわかりませんが、気長にお付き合いください。

第二十二話　少年の決意

「あ？　もう一回言ってみろよ」
思いがけぬ鬼灯の言葉に一番にかみついたのは、やはりエリザベスだった。
「話も聞いていなかったとは話にならんな」
「話ならしっかり聞いてたっての。それよりお前の頭がまだどこかおかしいんじゃないかってわざわざ聞き直してやってんだよ」
「おかしいとはどういう意味だ」
「お前、今の状況わかってないだろ。それかここ数日の記憶が飛んでしまったってのか？　お前は、魔界行って殺されかかって、今の今までへたってやがったんだ。そんな状況で魔界に戻るだ？　何考えてやがる……」
口調は乱暴だが、エリザベスの言うことはもちろん正論だ。常識のある人間なら当然エリザベスと同意見だろう。紫苑も萌黄も、きっと棗も同じことを言うに違いない。そういう反論が来るのを予想していたのか予想していなかったのか、鬼灯は険しい顔をした。
そして、エリザベスを鷲づかみにして抱えあげた。
「な、何やって……離せ、離せってんだ！」
鬼灯に抱えられ、振りほどこうと暴れるエリザベスだったが、鬼灯の鋭い目つきに一瞬だけ身じろぎした。睨んでいるわけではない。伝わってくるのは鬼灯の奥にある感情だ。
「お前……本当に行く気なのかよ……？」
「魔力が返ってきた今の私なら負ける気はせん」
「だからって、また殺されかかったら……もう助からねえ。わかってんのか？　棗もこんな状態になってまでお前を助けたんだぞ。子どもたちだって本当にお前のこと心配してたんだ。それを踏みにじってまで……お前は魔界に帰るってのか？」

「ああ、最低『例の石』を持ってくるためにもな」
「例の石って――もしかして魔王城の黄金の間にある、あの水晶のことか？」
鬼灯とエリザベスは平然と『例の石』について話していたが、紫苑は萌黄と向かい合ったまま、互いに首を捻らせた。何の話をしているのかはわからないが、魔王城にそんな石があるなどという話は聞いたことがない。ましてや、黄金の間という一室が存在していることですら知らない。その城に十年ほど住んでいたというのに。
だが、その石の話を持ち出した途端、意固地に反対していたエリザベスが揺らぎ始めていた。
「……確かにお前の言うことは一理あるかもな。しかもお前一人の危険で例の石が手に入るなら、悪くない話かも知れねえ」
「わかればいい。だからしばらく母さんの世話をしておけ」
「ふん、偉そうな奴だぜ」
鬼灯はエリザベスを床に降ろした。そして、何も知らぬ紫苑に視線を移した。
「紫苑、魔界に連れて行け。いや……魔王城にまで共に来る必要はない。一度私が魔界に帰ったことで兵も配備されているだろうし、危険だろうからな。ただ、魔界に連れて行くだけで構わん」
「いいよ、俺も魔王城まで行く」
自然と、言葉に出来ていた。鬼灯はまだ虚ろな目を見開いている。まさか紫苑からそんな前向きな言葉が出てくるとは思いもしなかったのだ。だが、しっかり前を見据えている息子に向かって満足そうな笑みを返していた。
「よく言った、成長したな紫苑。でもお前は来なくていい。さっきも言ったが魔王城には危険がある。私も本気で行かんと抜けられんほどのな。だから――」
「そんなことわかってるよ」
萌黄が心配と感激の混ざった表情を見せる中、紫苑は鬼灯の腕をそっと掴んだ。蜂の巣みたいに穴が開いた服の隙間から温かさを感

じる。
「紫苑お前……」
「迷惑なら行かないよ。でも俺……皆を守れるぐらい強くなりたいんだ。それに、父さんたちが受け継いできた秘密についても知っておく必要があると思うんだ。そのためなら、危険だっていう理由で黙って待ってなんていられないよ」
「そう、か。ならついて来い」
鬼灯はもう一度エリザベスを一瞥した。エリザベスは相変わらずつっけんどんな様子で気にする素振りもない。続けて萌黄に目を向ける。強気なエリザベスに対して萌黄はなよなよした野菜みたいに立っていた。この中の誰よりも不安そうだった。
「絶対、無事で帰ってきてね」
言った言葉は今にも消えうせそうだった。
紫苑は確信もなく大きく頷いて、鬼灯の腕をくいくいと引っ張った。もう行こう、この意志が消えない間に。そう伝えたのが素直に伝わったようで、鬼灯も深く頷いた。
萌黄とエリザベスがそれぞれ違う目線で見つめる中、二人は再びの魔界に身を投じた。

＊

二人が現れたのは、隙間風すら通さぬ頑丈な石造りの一室だった。
床に敷かれた赤いカーペットは滅多切りにされて原型を留めていないし、木でできていたはずの学習机には血でできた斑点があちらこちらに飛び回っている。割られたガラス窓の向こうに見える城下町では、未だ魔王のことを警戒してか軍隊たちが抜け目なく徘徊している。
「意外と灯台下暗し、か？」

紫苑から手を解いた鬼灯は窓の向こうを呆れて眺めている。
「わからないよ、俺の部屋がとりあえず無事だっただけで……気づけば追い詰められてるってことも考えておかないと、考えが甘いとすぐ付け込まれてしまうんだから」
「そうか、付け込まれないようにしっかりするんだぞ」
「いや、父さんに言ってるんだけど」
鬼灯の言う黄金の間は、この魔王城の地下五階の大空洞に存在するらしい。この紫苑の部屋は地上三階。一番手っ取り早いルートは、魔王城の中で最も隅にある非常螺旋階段を辿り、一気に地下四階まで下りるルートだった。

第二十二話　少年の決意（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
では、次回もいつになるのかわかりませんが、気長にお付き合いください。

第二十三話　地下の猛者たち

「あのさ、今更確認するのも何なんだけど、父さんって魔術使えるようになったの？」
軽快に非常螺旋階段を下りていく鬼灯の背中に、思い切って紫苑は声を掛けてみた。当の本人は振り向きもせず愉快なピエロみたいに一定のリズムを刻んでいる。
「不安か？　ならこの石像を破壊してやろうか？」
「目立つことは勘弁してよね……」
階ごとに置かれている女神の胸像を指差す鬼灯を一蹴する。胸像を壊すことで起こる爆音で人を呼びつけてしまってはすべてが水の泡だ。ましてや、女神をぶっ壊すなど罰当たりな気がしてならない。
同じところを同じように、円を描きながら下っていく。目が回る以上に気が狂いそうになる。ただ父の背を追っていくと、いつのまにか辺りは暗闇に包まれて、入ってくる光といえば螺旋階段の最上部――屋上から差し込む日光だけだ。
急に、前を行く鬼灯の足が止まった。螺旋階段の最終地点、地下四階に辿り着いていた。
闇が蠢く空間は湿気がたまり、そして真冬を思わせる寒冷な空気が充満していた。存在価値のない窓が存在するわけもなく、この城が建立された当時のまま、唯一時が止まっている場所だ。
一種のホラー映画の一シーンのごとく、何が出てきてもおかしくない非現実じみた雰囲気。
自分の足音にすら、鳥肌が立ってしまっている。
「――注意しろ」
「な、なっ……きゅ、急に話しかけないでよびっくりさせないでよ！」
目が慣れてくるにつれ、曖昧だった鬼灯の顔がぼんやり見えてき

た。
「まだ何も起こってないぞ、紫苑。慌てるのは何かが起こってからでいい。でなければオオカミ少年みたいになって……あげく誰からも信用されなくなるぞ、肝に銘じておけ」
「うう……わかってるよ」
「素直でよろしい」
冷気を吸った煉瓦を踏みしめる足音が天井に、床に反響している。こんなところで一人置いていかれることほど恐ろしいことはない。鬼灯の何倍も響く足音で追いかけ、紫苑は鬼灯の傍らに同じ足音で歩き始めた。
「あのさ、さっき何で急に注意しろとか言ったの？」
「地下四階にはウィリアムとかジェームズとかがいるはずなんだ」
足元の空気がざわざわと息を立てた。
「誰それ？　三年もよくこんなところにいるよね……って言うか三年前のクーデターを生き延びていた人がまだいたんだね！」
「人？　何を言っているのだ、人ではない。人間がこんな狭苦しいところで三年も過ごせるか」
「え？　じゃ、じゃあ幽霊とか……？」
「幽霊がこんなところにずっとこもっているか？」
「そうだよね……あ、もしかしてエリザベスみたいな猫だったりする？」
「だから、猫がこんなところで三年生きていられるか？」
「じゃあ、ここにいるのって、何――」
吹くはずのない風が二人の髪を靡かせた。鳥肌の数は史上最高を迎えている。見上げた先の鬼灯はやれやれと頭を掻いているだけで、慌てる気配はない。
「クーデターから生き延びて、三年生きていられる奴らって言えばこいつらしかいないだろう？」
今までにない重低音が煉瓦を伝っている。波のように迫り来る重低音は次第に地下四階を揺るがす振動に変わっている。それが足音

だと気づいたときには、再びの強風が顔面を襲っていた。
とっさに閉じた瞳を開くと、もう確認できた。ルビーのような巨大な瞳、魚とは比べ物にならない強固な緑の鱗、一度引き裂かれたら決して無事ではいられない鋭い爪。
「嘘だ、父さん！　ドラゴンが何でこんなところに……！」
「私のペットだ」
言いながら鬼灯は紫苑の手首を鷲掴みにし、迫りくるドラゴンを無視して奥へ走りさっていく。すでに紫苑の足は雁字搦めだ。
「ペット、だって！？」
鬼灯が飼っていたペットと、紫苑には面識はなかった。と言うのも魔王城の中でも子供たちが行き来できない場所がいくつか存在していて、そのひとつにペットの居住区域が入っていたからだ。だから、父が何を飼っているのかなんて想定もしたことがなかった。
「ああ。今のは陸棲ドラゴンのウィリアム」
「で、そのペットから何で逃げてるわけ？　三年ぶりの再会なんでしょ？」
「三年ぶりだから逃げているのだ。つまり三年間、こいつらは餌も食ってない……そこに久々の食料が入ってくれれば食われるのがおちだぞ」
血相を変えて襲い掛かってくるウィリアムの足音が迫る中、今度は鬼灯の目の前に別のドラゴンが顔を出してきた。
「お、これはジェームズだ」
隙を抜け出し、突き当たりにある地下五階への階段へ駆けていく。鬼灯に引っ張られているだけの紫苑のすぐそばにはウィリアムとジェームズの荒い息が迫ってくる。
「父さん！　倒さなきゃ殺されるって！」
「倒す？　そんなことできるか、こいつらは高かったんだぞ、希少価値も高くて、売れば数億になる輩だ。傷をつけるなんて言語道断、逃げるが勝ちだ」

第二十三話　地下の猛者たち（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
では、次回はいつになるのかわかりませんが、気長にお付き合いください。

第二十四話　黄金の間

「何を今更気楽なこと言ってるんだよ、このまま殺されたら価値も何もかも無意味だってことわかってる？」
引きずられていく身体をうまく制御し、紫苑は陸棲ドラゴンの吐息から何とか逃げ続ける。引きずる父は紫苑の忠告など耳を貸すはずもなく、そのまま直進していくのみだ。
「少しは落ち着かんか、もうすぐ終点だぞ」
鬼灯が言うなり、突き当たりの脆い木製のドアが蹴破られていた。思わず顔が真っ青になる。吹き飛ばされる思いでドアがあった方向に振り向くと、ウィリアムとジェームズは首を突っ込んだだけで身体がつっかえているようだった。睨み付けてくる二体のドラゴンから即座に目を逸らし、鬼灯に目を向けた。鬼灯はさらに奥――くすんだ土色の地下階段を覗き込んでいる。
「ずいぶんかかったがこの奥だろうな」
「向こうが、その……黄金の間？」
「ああ、初代とやらが権力と財力任せに創り上げた間だ。まったく少しぐらい今の私に分けてくれたらもっといい生活ができたものを」
「そのいい生活をしようとしたから追放されたんでしょ」
「いい生活を望んで何が悪い。人間とはそのようなものだろう。それより紫苑、お前に聞いておくべきことがある」
「何、急に改まってさ？」
「――お前、力が欲しいか？」
鬼灯の眼力はいつになく強かった。あまりの圧力ゆえ、ひるまされる以上に呆れ返るしかない。
「急に、何？」
「いるのかいらないのかはっきり言え。それ以外の返答戯言は必要ない」

「そりゃあ……もらえるものはもらっておいたほうがいいよね？」
「そうか、ならお前にも力をやることにしよう」
「ねえそれってどういうこと？」
紫苑の戯言に気にもかけず、鬼灯は古の階段を足取りよく降りてしまっている。
かいてもいない汗を拭って、紫苑はため息を吐いていた。力がもらえる――確かに自分自身強くならなくてはと思ってはいたがこんな形での力の入手というのは予想もしていなかった。しかも鬼灯が何も説明しないところを見ると、どうも怪しい。その力とやらを手にするためにどれだけの犠牲が伴うか、たいていの予想はつく。
余計なことにならなければいいけど。
それだけが今の紫苑の願いだった。
地下五階に下りるなり、紫苑は両手で目を覆った。指と指の隙間から奥をのぞき見ると、そこには光り輝くカーテンが掛かっていた。いや、カーテンといっても物質として存在しているわけではない。ぼんやりと浮かぶ、虹色のオーロラが地下に現れた感じだ。そしてその裾には、黄金でできた杯が鎮座されている。
「ここが黄金の間だ」
「黄金って言うより眩しいね」
「眩しい？　それはお前の魔力がまだ成熟しておらん証拠だ。私には痛くも痒くもないぞ」
「俺だって痛くも痒くもないけどね。それよりもこの光は何？」
「結界だ、魔王家の血を引く者しか入れないようになっている……この中にある『あの石』が持つ力だ」
すでに結界の奥に入っている鬼灯に導かれるがまま、恐る恐る紫苑は光り輝く結界に指を触れた。しかし感触はない。ただ代わりにあるのは不思議と暖かさだった。瞳をぐっと閉じたまま結界をくぐった紫苑は、黄金の間の真の姿を目にした。
「……噴水？」
公園にある噴水とは一味も二味も違う。溢れかえる水は結界の光

に当てられて金の眩しさを放っている。その水を放つ土台はすべて純金でできており、女神や蝶、蔦の装飾が細かく施されている。放たれた水は吸い込まれていくように輝く池を形成していく。
　黄金の噴水を前に鬼灯はその水に手を触れている。金粉のように流れる細かい光の粒子が、指の間を流れている。その姿はまるで意思を持っているかのようだ。
「ただの噴水ではないぞ、これこそが魔王家の最大の家宝――輝く魔水（ジッド）だ」
「噴水じゃなくて、水が家宝だってこと……この水が、何かあるの？」
「この水を求めて今まで何度戦争が起きたと思っている。あのクーデターの要因のひとつもこの水だ。そして今、勇者四人衆が魔王家の血を求めているのもこの水が原因だ」
「え、魔王家の血とこの水が何か関係があるってこと？」
「直接的にはない。さっき黄金の間の入り口で杯を見たな？　あれだ。本来ならここには魔王家の人間しか入れんのだが……初代の気まぐれかなんだかで無関係の人間でもここに入れる仕掛けを作った。それがあの杯だ。そこに魔王家の血を一杯まで注ぎ込むことができたなら、結界が解ける仕掛けだ。それがあるから今、勇者四人衆が私たちを襲うのだ。わかったか？」
「わからないことも、ないけど。それより、そこまでして求めてるこの輝く魔水ってのは、一体何？」
　じっと眺めてみても、輝いているだけで普通の水と大差ないこの家宝。
　と、鬼灯が再び切り出した。
「お前、力が欲しいといったか？」
「いまさら何を言い出すんだよ」
「力が欲しいと心から望むか？　もしそうなら」
「そうなら、何さ？」
「――この水を、飲め」

第二十四話　黄金の間（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
では、次回もいつになるのかわかりませんが、気長にお付き合いください。

第二十五話　魔水の与える力

「――殺す気？」
いつになく冷めた声で即答してしまっていた。
でもそれは仕方ないのだ。どう見てもその輝く魔水（シャージッド）は尋常なものではない。輝きを放つ水。しかも戦争を巻き起こす災いの水。それを口にしたら最後、こんなところで人生終えたいとは思っていないのだ。
「殺すとは何を言う、お前は大切な跡継ぎだ。甘やかすことはあっても殺すなんて人聞きの悪い……」
「でもこの水どう見ても飲み物じゃないだろ」
「――確かに飲み物ではないぞ。家宝だしな」
しらけた表情で鬼灯が言うから、さすがに紫苑の堪忍袋の緒は切れた。
「飲み物じゃないもの飲ませようとした訳？　やっぱり殺す気だったんだ、だから大人は信用できないんだよ！　わかる、父さんそういうところが駄目なんだ、だから追放されたってわかる？　さっき偉そうに『クーデターの原因はこの水だ』とか言ってたけど、そんなの原因の一パーセントにも満ちてないよ。原因は間違いなく父さんのそういう性格に痺れを切らしてさ……」
「黙れ紫苑。こんなところでうだうだ説教をしている場合でないことぐらいお前にもわかるだろう。お前はカッとなると周りが見えなくなるから困る」
不本意にも鬼灯の言うことは正しい。それに話が通じない相手に対して怒っているほど時間を無駄にすることはないのだ。恨めしく睨みつけただけで無理に諍いを治めた紫苑は、改めて輝く魔水に目を戻す。
「それで、これの持ってる力を教えてよ。簡潔に、一言で」

「いちいち条件をつけるな……面倒だが割愛して言ってやろう。輝く魔水は――初代魔王の魔力を帯びた水だ」
「初代の力？」
「ああ。初代の魔力と権力が抜きん出ていたことは話したな？　まあ私ほどではないのだがな。だから死ぬ間際、初代は後代のために魔力を残した」
「それがこの水に宿ってることだね。つまりこの水には相当の魔力が宿ってる。だから勇者四人衆とか大臣とか、皆この水を求めてるのか」
「魔力の享受もこうやって水に触れるだけ、いたって簡単だ。一人の人間が受け取れる魔力には限界があるがな。しかもこの魔力はある程度自然増殖していくから枯渇することはまずない。これさえあれば、世界の支配など容易いものとなる。だから代々輝く魔水は家宝とされて、魔王家の魔力と権力の象徴として隠されてきたのだ」
　再び輝く魔水に腕を透かしている鬼灯の傍らで、紫苑は見ているだけだった。触れるだけで力が手に入る。それなのに、触れようという気が起きない。
　ここで力を手に入れたら、父さんがやってきた政治とそんなに変わらないんじゃないか。
　つまりここで力を手に入れてしまったら、また同じような争いが起こってしまうんじゃないか？
　この水を無くしてしまわない限り――。
「何をしている紫苑。いくらこの輝く魔水といってもな、自ら近づかない者には力を与えられんぞ」
「いや、やっぱり俺はこの水……」
「そうか、この水を飲みたいと言うのだな。いい度胸だ。かつて飲んだ人間など存在せんからどうなるかはわからんが、お前は未知の開拓者になる……」
「違う！」
「違う、ってそんなに血相を変えて言わなくてもわかっている。さ

すがの私もお前が嫌がるのに死ぬ思いを味わせる趣味はない。でもな」
紫苑の身体がぐらり揺らいだ。鬼灯の腕にわしづかみにされていると気づくやいなや、眼前には水面が映っている。輝く水面だ。例の噴水に突き飛ばされている――そう確信したときには、飛び散る水しぶきが全身に飛び散っていた。
最悪だ。
それから一秒足らずで、息を荒らげずぶぬれになってしまった紫苑は噴水から飛び出した。熱湯の中に放り込まれて逃げ出してきたように反射神経が働く。息も整える間もなく、犬みたいに身体中から水を払っていると、紫苑の耳を豪快な笑い声が通り過ぎた。
犯人である鬼灯は紫苑の思いとは裏腹に笑い飛ばすだけだった。
「ははははっ……これでお前も強くなったぞ。よかったな」
ぴきぴき。額に血管が浮かび上がっているのが紫苑自身にもわかるほどだった。それどころで根に持つ性格の紫苑の怒りが収まるはずもない。空想（アピス）で鬼灯の眼前から消えたと思うと、その背中を思い切り蹴飛ばしていた。
「どうしてくれるんだよ……！」
「よかったではないか、力が欲しいと言ったのはお前のほうだぞ。これで間違いなくお前の力は強くなった」
不意の蹴りを食らい、膝をついた鬼灯の背に再びの蹴りが襲う。最初の一撃よりも輪をかけて強烈である。鬼灯ですら床に転げてしまった。
「ほら、お前の力は間違いなく強くなっている。お前の空想のスピードは速くなっている、私でも追えぬほどの、なっ！？」
床に這いつくばっていた鬼灯の背に足を下ろした紫苑は、感情任せに何度も踏みつけだしていた。
「やめろ、そんなに力が欲しくなかったのかっ？」
「力は、それは、欲しかったよ？　でも、触れるだけだって、言ってたはず、だよね？」

「それはお前がさっさと触れないからっ！」
「どうして、くれるんだよ！　最悪だ……さっき噴水の中にぶっ飛ばされたせいで、あの輝く魔水とかいうの……ちょっと飲んじゃったじゃないか！？」

第二十五話　魔水の与える力（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
では、次回もいつになるのかわかりませんが、気長にお付き合いください。

第二十六話　二つの家宝（前書き）

突然ですが、第二章完結です。
前もって言えなくてすいません……構想不足なんです。

第二十六話　二つの家宝

「飲んだ、のか？」
「飲む気なんてさらさらなかったんだけどね……勝手に喉に入ってきたんだから仕方ないだろ。ああ、生きてるだけマシだと思おう……」
父の背から足を離し、紫苑はもう一度輝く噴水を一瞥した。
何事もなかったかのように、噴水は噴き上げては零れ落ちている。
「身体は、大丈夫なのか？」
無責任な父親にしては珍しい一言だった。それでも紫苑はふてくされたまま口を尖らせている。
「打ったところはまだ痛いよ」
「それはどうでもいい。気になっているのはだな、輝く魔水（シャージッド）を飲んだ影響についてだ。身体の中は何ともないのか」
「……見ての通り元気だけど」
精神的なダメージは酷いものだけど。
凶器を捨てた殺人犯のように両手を広げてみせた。鬼灯は何も言わずに、全身を撫で回すように紫苑を眺めている。マネキン相手ならウインドウショッピングの、女性相手なら間違いなく変態の眺め方である。
「何でそんなにじろじろ見てるんだよ、俺なら平気だって」
「いや……どうしようか迷っているのだ。飲んでも身体に差し障りないなら飲んだ方がいいのかどうか」
「飲むって、父さんが？」
「ああ。輝く魔水は魔力を自然に増幅してくれるのだぞ。それを体内に持っていれば、私はますます最強化できるのではないか……とは言っても家宝であるし飲み物でもない、どうなるのかはわからんし、これが原因で破滅してしまったら元も子もないだろう。それな

ら素直に現状を維持しておくべきなのか」
「好きにしてよ。それよりも『例の石』って言うのはどこにある訳？　それを探しに来たんだろ」
鬼灯が魔界に戻ると言った原因であり、エリザベスも納得して見送った『例の石』。そこまで言うからにはただの石ではないのだろう。だがこの黄金の間にあるというのに、部屋の中は輝く噴水しかない。
結局紫苑の経過を待ってから飲む、と勝手に決めた鬼灯は噴水の中に手を突っ込んだ。まだ力が欲しいのか、あきれて見ていた紫苑だったがその考えはすぐに消えた。鬼灯が噴水の底から掴み上げてきたのは、ガラスのように透き通った、ほんのり赤い丸い石だった。手渡された紫苑はその中身を覗き込むように見始めた。
「この黄金の間の結界を張っているのが、もう一つの家宝であるこの『魔神（メタリス）の水晶』だ」
言って鬼灯は再び噴水の中から同じ石を取り出して見せた。どうやらこの噴水の中に沈められている石は一個だけではなく、最低五個は存在するようだった。
「魔神の水晶さえあれば、効果範囲に他人の侵入を防ぐことができる。もちろん勇者四人衆も例外なく結界にはじき出される」
「これがある場所は安全になるってことだね」
「それだけではないぞ、この水晶をちょっと砕いてやって効力を弱めておけば、学校に行くときのお守り代わりにもなるだろう。奴らに突き出してやれば全く近寄れんからな。一個ぐらいならここから持ち出しても構わんだろう」
「砕くって……それ家宝なんだよね？」
口だけで答えておいて、改めて魔神の水晶を見つめた。一見透き通っていると思っていたがそうではないようだ。粉雪のような物質がその中を漂っている。ふわふわと動き回り、命を持っているかのようだ。どうもこの水晶の中には水が入っているらしい。
砕いても大丈夫なのかなあ。

後々が不安になる。
「紫苑、用は終えた。早く帰るぞ」
余分に手に抱えていた水晶を噴水の中に返した鬼灯に揺さぶられて紫苑は我に返った。考えるのは後でもいい。今はとにかく早くここから離れることが先決だ。危険の中にいることはできる限り避けておきたいのは二人とも同じだ。
左腕に魔神の水晶、右腕に鬼灯に触れ、紫苑は温かい家庭を思い浮かべていた。
足音が頭の中を駆け抜けていくのを、確かに感じながら。

＊

「――うわ！」
エリザベスの叫び声だというのは考えるまでもなくわかった。同時にわかったのは、現界に無事に帰ってきたということと、その帰ってきた場所が偶然エリザベスのちょうど真上だったことだ。
「ふざけんじゃねえ、さっさと降りろよ！」
前触れもなく紫苑に圧し掛かられたエリザベスは、紫苑が降りても機嫌を悪くしたままで――いや、むしろ機嫌が悪くなっていく一方だった。苦笑いで諌めようとしても、火に油を注ぐようなものだったが、その口調がむしろ今まで心配していた反動なのかと思うと、紫苑は素直に叱られつづけるしかなかった。
「ったく、マナーってもんがなってねえよ。鬼灯もそれぐらい教育しておけよ」
紫苑が大人しく聞いているにもかかわらず、鬼灯は魔神の水晶を眺めたまま冷めた表情で突っ返す。
「私は教育はせんぞ、教育をするのは基本的に学校と教育係だろう」
「何だお前育児放棄する気かよ、偉いご身分だな」

「わかってなかったのか？　私は魔王陛下だ、偉いご身分なのは言うまでもない」
「……お前に喧嘩売るのが馬鹿だったぜ。それはそうと棗の世話はちゃんとお前がしろよ。あたいの仕事はここまでだかんな」
数時間経っていたはずだが、棗は未だあの時のまま布団の上で眠っていた。
「母さん、帰ってきたよ……」
敷かれたままの自分の布団に寝そべって、紫苑は無意識に呟いていた。呟いて、いつのまにか気を失っていた。
やっぱり隣に母さんがいないと眠れない子供よね。
頭元でささやく萌黄の言葉なんて、聴かなかったことにしておこう。

第二十六話　二つの家宝（後書き）

と、今回はこれでおしまいです。
二章もおしまいです。
これから視点は萌黄に戻る予定です。きっと。

あと、三章を始める前に二章のまとめとちょっとした番外編を挟もうと思うので、そちらもぜひご覧ください。

the secondary chapter. 二章のまとめ（前書き）

第十四話から第二十六話までのまとめです。

the secondary chapter. 二章のまとめ

☆★　第二十六話まで（二章）のあらすじ　★☆

魔界に戻った鬼灯と紫苑。そこで最初に知ったのは、彼らを追放した大臣が今や二期連続の大統領に当選したことだった。鬼灯が激昂して魔王城に突撃している間に、紫苑は魔界に戻ってきていた嬢子に誘拐されてしまう。デートをする羽目になったが、逆に倒れて嬢子の家に入ることになってしまった。どうするべきか迷う紫苑の前に謎の少女・輝が現れる。彼女に言われるがまま、紫苑は嬢子の家から脱出する。鬼灯と再会した紫苑だったが、輝と関わっている間に鬼灯は政府軍に銃撃を食らっていた。

現界に帰ってきた紫苑たち。鬼灯についてきたというエリザベスとともに、棗は寝室に篭って生命魔術の儀式を行う。一命を取り留めた鬼灯は、あるものを取りにいくといって、再び紫苑とともに魔界に戻るのだった。

魔王城に現れた二人はそれがあるという地下五階・黄金の間を目指し階段を下りていく。地下四階でジェームズとウィリアムに襲われるも、何とか脱出し黄金の間に至る。黄金の間には魔王家以外の人間は入ることのできない結界が張られていた。鬼灯によると、入り口に置かれた杯いっぱいに魔王家の血を注ぐと結界が解けるのだという。それゆえ勇者四人衆は彼らを狙っていた。中には輝く水を放つ噴水があった。それが家宝の一つであり、勇者四人衆および大臣（今は大統領）に狙われているもの――輝く魔水（シャージッド）だった。それに触れるだけで魔力を手に入れることができるのだという。鬼灯の悪戯で紫苑は魔水を飲んでしまう……。

そして黄金の間で手に入れたかったもう一つの家宝――魔神（メタリス）の水晶を手にする。黄金の間の結界を張っているもので、それを持って

いると魔王家以外の人間が近づけないようになるという。
魔神の水晶を手土産に、二人は現界に戻った。

☆★　二章から登場した登場人物（大半人間ではない…）　★☆

・都束　輝　／　Ｋｉｒａｒａ　Ｔｏｚｏｋｕ　／　非現実的な嬢子を根っから嫌っている、盗賊一族の少女。騙しと盗みを司る。任務と命令は素直に遂行する。一人称は「輝」。

・エリザベス　／　Ｅｌｉｚａｂｅｔｈ　／　鬼灯が昔飼っていたペットその１。毛並みが美しい、言葉を話す白猫。主に似て口は悪いが、困っている人は放っておけない性格。もちろん鬼灯や棗とは同等に話す。

・ジェームズ＆ウィリアム　／　Ｊａｍｅｓ　ａｎｄ　Ｗｉｌｌｉａｍ　／　鬼灯が昔飼っていたペットその２と３。魔王城地下四階に住む陸棲ドラゴン。何年か食べなくても生きられるようだが、食べていないので機嫌は悪い。

the secondary chapter. 二章のまとめ（後書き）

次回から第三章になります。

ですが、こちらの都合でしばらく投稿が遅くなるかもしれません。（やらないといけないことが山のようにありまして。）なので、しばらく感想等の受付もできないです…お返事が遅れるのは嫌なので。

以上、自分の勝手な都合ですが、しばらく後（そんなにかからないとは思うのですが）も宜しくお願いします。

それでは、よいお年をお迎えください。

another side そのころの萌黄（前書き）

ほぼ一年ぶりです。私事で数か月ほど色々ありまして。まあ、まだもうしばらく掛かりそうですが……。

そんなことはともかく、本当に時間が掛かってすいませんでした。とりあえず久々に書くので本編から始めず、二章の番外編という形で書かせていただきます。

another side　そのころの萌黄

本当は、紫苑のこともわかっているつもりだった。それなのに強い言い方をしてしまったのは、そんな紫苑をじっと見ていられなかったって言うのが本当のところだった。言い訳みたいになってしまっているけど。

鬼灯と紫苑が魔界に行ってしまった朝、萌黄はいつものように学校に通っていた。棗は行かなくていいと言ったが、萌黄はそれを振り切って今教室にいる。昨日の今日で襲われるかもしれない。わかっていたけれど、鬼灯も紫苑も身を危険に晒して行ってしまったのに自分だけ逃げるなんてことは、自分自身許せなかった。

そう決心していたものの、戦士一族である千臣は、今日学校に現れなかった。女子のブーイングが強まる中、茶々先生が言っていた彼の欠席理由は風邪だったと思う。何が原因でも萌黄には構わないが、とりあえずほっとため息はつけた。

しかし安心は放課後に崩れた。一番に帰宅しようとする萌黄とリッちゃんが教室のドアを開くなり、金髪ピアスの少年が顔を覗かせていたのだ。

「千臣篤志は今日来てる？」

松陵圭太だ。まさか待ち伏せされていたなんて。目を丸くして動けずにいる萌黄に気づいていないリッちゃんは素直に首を振って、千臣の空いた席を指差した。

「千臣君なら今日は風邪で休みだって」

「ええ！？　嘘やろ、千臣まで休みって……ああ、最悪や！」

聞くなり松陵は頭を抱えたまま、あたり構わず叫んでいる。

「何かあったみたいだね」

「リッちゃん、こんな頭のねじ外れた人間に構うことないって」

相手にしていていいことなど何もない。むしろこちらまで変人扱

いされるかもしれないのだ。それだけは御免だ。リッちゃんが背負っているリュックサックを強引に摘み上げて教室を出て行った。
　ああいう性格の奴ほど何を考えているかわからないものだ。こちらが油断している隙に付け入ろうと伺っているのかもしれない。そうかもしれないし、何にも考えていないだけで素で叫んでいたのかもしれない。まあどちらにせよ、あの場からさっさと距離を取ったのは賢明な判断だったはずだ。
　萌黄の都合で校門まで引きずられてきたリッちゃんは不本意そうに帰って行ってしまった。
　不本意なのは萌黄も変わらない。でもその不本意に巻き込まれたリッちゃんには申し訳なく思う。
「あーもう、せっかく千臣がいなかったのに何であの変人が来るかなあ……」
「変人て誰のことや」
「あんたのことよ、さっきからずーーーーっと後つけてきてたでしょ」
　気づけばリッちゃんがいたところに松陵が立っている。その屈託のない笑顔は萌黄の怒りをあっという間に燃え上がらせた。だが当の本人はへらへらと剽軽である。周りをすり抜けていくほかの生徒たちは目にもくれない。
「あ、わかってたんか」
「バレバレ！　で、何か用？　まったく興味のないことなら帰らせてもらうけど」
　言いながら、萌黄は自宅の方向へ足を向け歩みだしている。でも背後から響く軽快な足音は松陵のものに間違いない。やっぱりつけてくるつもりらしい。
「んじゃ質問1、千臣と嬢子はどこへ行ったでしょうか？」
「知らないわよ。それに質問1とか言ってるけど2以降も興味ないから」
　萌黄の歩調は1・5倍速（通常時比）になる。

「むう。でも質問２や。千臣と嬢子は何をしに魔界に戻ったと思う？」
「魔界に戻ってるの！？」
萌黄の歩調は徐々に遅くなり０・７５倍速（通常時比）にまで落ちた。
質問１の出題の意図はよくわからないがその疑問は頭の隅で小さく消えていった。
それよりも千臣と嬢子が魔界に戻っているということは、もしかしたら今日の朝魔界に向かった父と弟が鉢合わせているかもしれない。嫌な予感が胸を過ぎる。目の前が闇で覆われていく気がした。そのまま闇に意識を奪われてしまいそうになった。萌黄の歩調は０倍速（通常時比）になった。
肩に触れた松陵の腕を振り払うことはできたが、目の前の現実だけは振り払えない。振り払ってもそこには現実がある。
「なんや、誰かが魔界に居るってことか」
「……うるさいわね」
「でも大丈夫やと思うけどな。その誰かさん」
「何その不確かな確信」
「だって出てないもん、お告げ。神様は『まだ状況は打破されへん』って言ってるし」
「あんたの神様信じるほどあたしは愚かじゃないわよ」
自分の心のどこか奥底で安心の笑みを浮かべたのは確かだった。
でも、萌黄の歩調は２倍速（通常時比）になり、さらにはそのまま走り出していった。横断歩道での信号待ちで一度だけ後ろを振り向いた。もう後から追ってくる様子はなかった。代わりにグラウンドから聞こえる運動部の掛け声だけが飛び掛かってくる。
１，２，３，４，５，６，７，８。
そのリズムに触発されて、萌黄は２００倍速（通常時比）でスキップして帰っていった。

無事に帰ってきてよね、あたしたちの神様。

another side そのころの萌黄（後書き）

今回はこんな感じで。
次回もなるべく早くに書きたいですが、どうなるかわかりません。
末永くお待ちください。宜しくお願いします。

another side 2 そのころの千臣（前書き）

第二章の書ききれていなかった部分を補う番外編です。

another side 2 そのころの千臣

今まで、どれだけあの男を殺そうと思ってきたのかはわからない。生まれたときからずっと、殺すことだけを叩き込まれてきた身にとって、直接対決での敗北は屈辱以外の何物でもなかった。

参観日のあの日、魔王の実力のほんの一片を垣間見、そしてその一片に圧倒されてしまっていた。あのとき嬢子と松陵が来なかったら、今頃この命はなかった。そう断言しても構わない。

鍛錬は続けてきた。自分を追い詰め、怒りと憎しみを高ぶらせてきた。そしてそれを制御できるほどの冷静さも同時に高めてきた。それなのに、感じたのは恐れだった。

一度魔界に帰ってもう一度鍛錬しなおすしかない。そう嬢子に言うと、満足そうに同情の微笑を返してきた。

「わかってる。まだまだ魔王に勝てないのは私にもわかった。勝つためには私たちももっと強くならなくちゃ駄目だってこともわかったよ。だから篤志君の言いたいことも正統」

「じゃあ魔界への移動許可を出してくれるか？」

「たぶん、うまく許可は取れると思うわ」

「頼む。一刻も早く強くならなければならないんだ」

「戦士一族の性ってところかしら。でも無茶しちゃ駄目だよ、鍛錬することは正しいことだと思うよ。だけどそれで潰れちゃったらもう立ち直れなくなる……だから、ね」

「――強くなることが、悪いことか？」

「そんなわけじゃ、ないけど」

「なら余計な口出しはしないでくれないか」

そんなに強い語気で言ったつもりはなかった。だが嬢子は身じろぎした様子で一つだけこくんと頷き返すと、そのまま箒に跨って空へ飛び立っていった。

嬢子に強く当たっても、何の意味もないことはわかっている。それどころか彼女を傷つけ、果てには自分の靄も晴らすこともできない。

焦っても何もないのに何やってるんだ。焦ったって、もう誰も帰ってこないっていうのに。

彼の前に広がる空は彼の思いとは裏腹に晴れ渡っている。

＊

それから二回目の夜が明けようとしていた。

魔王城からみて南東に十キロ離れた雑木林の中。代々戦士一族が管轄していた狩猟地区で千臣は鍛錬に励んでいた。何十、何百の獣を狩ったかはもう覚えてはいない。ただその手に残るのは生々しい彼らの紅だけだ。入ったときに聞こえた獣の嘶きはもはや絶え、この辺りの獣はほとんど狩りつくしたことだろう。荒れた息を切り株に座って整えていると、黒く縮れた髪の少女が北の方角から現れた。

「千臣篤志君、だよねえ」

彼女は地獄から現れた死神のように笑みを浮かべている。

「初めまして、盗賊一族の一人、都束輝っていうの。よろしく」

「――何の用だ」

「もう何その態度。輝はねえ、君にとって嬉しいニュースを運んできてあげたんだから」

「何だ」

「あん、素っ気無いなあ、面白くない。で、ニュースなんだけど、あの魔王鬼灯が政府軍に銃撃を食らって蜂の巣にされちゃったって話なんだけど――」

「ふざけるな」

頭の中の感情がすべて消えうせていた。気づけば血に塗れた鬼の紅剣が輝の喉元に切っ先を向けている。

「や、やめてよね初対面の人間に凶器突きつけるの！　それにふざ

けてなんかないよ、本当なんだから。輝も目の前で見たもん。そうだ、新聞読んでみたらどう？　輝の言ってること嘘じゃないってわかるから、ね？　だから離そうよ、その物騒なもの」
輝が両手を合わせて必死に懇願しているのも、もはや耳にも届かなかった。
鬼の紅剣は、獣たちの死骸の上に刺さった。
まさか他の人間に呆気なくやられてしまったと？
あれだけのことをしておいて？
――確かにお前は馬鹿だったな。
魔王鬼灯の言葉が脳の中を反響して離れない。
「もう、落ち着いてる？　あのねえ、何を絶望してんのかまったくわからないわけじゃないけど、あの魔王鬼灯が死んだって確定したわけじゃないよ？」
輝は腰に下げたポーチの中からピンク色のガムを取り出し、口にしている。
「だあって魔王に重傷負わせた時、息子が空間転移させちゃったからねえ」
「何が言いたい？」
「え、知らない？　もしかしたらだよ、助かってるかもしれないじゃない。魔王妃の生命魔術を使えばもしかしたら、ね」
輝が何を思って物事を口にしているのかはわからない。だが確かにそうだ。三年前のクーデターの時と同じだ。鬼の紅剣に刺され致命傷を負った鬼灯を完治してみせたのはあの魔王妃の魔術だったのだ。
くちゃくちゃとガムを噛む音が耳に障る。
「それを言いにわざわざここに来たのか？」
「まあね。輝は千臣君のこと応援してるし、始めた復讐は最後まで果たしてもらわないと」
「そうか、強く当たって悪かったな」
「そんなこと気にしなくたっていいんだってば。輝、そういうの慣

れてるし。あ、これ食べる？」
　差し出されたガムを受け取り、同じように口に運んだ。人工物の香りと味が満ちてくる。
「あ、そうだそうだ。嬢子の馬鹿から連絡頼まれてたんだっけ。今回魔王を襲撃できたことで集まった血は必要量の三分の一ぐらいだったらしいよ。全部流れ出す前に連れ出されちゃったからね、想定よりも少な目だったってさ。嬢子の魔術を使って地面の中に染み込んだ血液も採取したんだけど、納得する結果は出なかったみたいね。ふふ、嬢子のがっかりした顔がなんとも面白かったー」
　嬢子の魔術とは本人曰く「天秤魔術」だという。確か、ある物質に重さを与える代わりに、他の物質に軽さを与える、一言でいえばそんな魔術だと解説していた。おそらく今回は辺りの地面を覆う砂に重さを与え、血液の成分を軽くすることで採取しているのだろう。
　千臣は鬼の紅剣を抜き去り、刀身を眺めた。赤黒い刃はさらに紅を吸い、真紅と化している。
「魔王城に行ってくる」
「へ？」
「もし奴が生きていたとして、魔界に現れたとすればきっとそこに現れる」
「確信なの？」
「……そうだ」
　切り株から立ち上がると、北から吹く風が千臣の髪を撫でつけた。
　そしてその向こうには城下町が、魔王城がある。
　傍らにいた輝はもういない。声だけが風に紛れて残っている。
「そ。なら止めない。やるべきことをやりたいようにやってきて、戦士一族最後の一人として」
　ガムの味はすぐになくなったけれど、彼はそんなことも気にせず、一歩一歩踏みしめていった。

第二十七話　父さんの判断（前書き）

第三章ようやく開始です。

第二十七話　父さんの判断

長い眠りについている母と紫苑を置いて、リビングに戻った萌黄たちは状況を語る鬼灯の話に耳を傾けていた。

「それで一番驚いたのはだな、あれだ。陸棲ドラゴンのジェームズとウィリアムに再会したときだ。クーデター以来どうなったのか心配だったが元気そうで何よりだったな。主である私を丸呑みにしようとしたときは……」

「ジェームズとウィリアム？　奴らまだ生きてやがったのか、さっさと逝っちまえばいいのによ」

エリザベスは鼻を鳴らして嘲笑している。陸棲ドラゴンのことについてはよくわからないが、萌黄は状況に置いていかれないように何とかしがみ付こうと口を挟んだ。

「エリザベス知ってるの？　その、陸棲ドラゴンたちのこと」

「知ってるも何も、頭に焼き付いて離れねえよあんな奴ら！　ああ、思い出しただけで寒気がするぜ。しばらく地下四階に同居されたことがあんだよ。あれもこれも地球上生物の中で一番の悪党であるこの鬼灯（オニズキ）がな！」

「その呼び方をするとは口が引き裂かれたいようだな、宇宙上生物の中で一番の生意気であるエリザベス？」

エリザベスの体を床から引きはがそうとする鬼灯と、隙あらば猫が秘める鋭い牙で鬼灯の腕にかみつこうとしているエリザベス。隣の部屋で二人がぐっすり眠っているというのに、主と白猫は争いのボルテージを下げようとはしない。いや、むしろ上がっている。萌黄はたまらず正座している足を叩いた。

「あーもう！　母さんの前でみっともないからやるなら外でやってくれる外で！」

萌黄の侮蔑の眼差しに、途端に一人と一匹は凍りつく。こういう

とき、母親である棗の血を引いていると実感できるのだ。静まりかえった寝室に反省の意味の溜息を返して、黙りこくった二人に向いた。
「私が聞きたいのはその石のことよ。魔神の水晶って言ったっけ？　それどうするつもり？」
黄金の間で拾ってきたという家宝、魔神の水晶。今もカーペットの上で不変の輝きを放っている。流れている光の砂が揺らいでいくさまは、まるで真夜中の空に浮かぶ天の川のようだ。ぼんやり眺めていると、エリザベスを床へ放った鬼灯が掬い上げるように持ち上げた。
「適当に割って皆が適当に持てばいいだろう」
「……一つ聞くけど、適当ってどの程度が適当かわかって言ってるのよね？」
「だから適当だと言っているだろう」
萌黄の主張など聞く耳持たずに鬼灯は魔神の水晶をじっくり鑑賞している。
「だがなんだかもったいない気がするな。この水晶の希少度はウィリアムたちを軽く上回るぞ。現界の人間には理解のできない価値が存在するのだ」
「現界の人間に理解できないのは当たり前だろうがよ。魔王一族以外は触れるどころか寄せ付けない結界を放ってるなんて言ったって誰もわかりゃしねえんだかんな。何よりお前今さらふざけたこと言うなよな。これからの身の安全性を考えればどうでもいい話だろ。わかったらさっさと割れよ。自称最強の魔王様を名乗るんならこれを破壊すんのも一瞬だろ」
エリザベスはいつになく鋭い眼差しで鬼灯に突っかかっている。この猫の言うことはもちろん正論である。当たり前なのだが、それでも鬼灯は勿体ぶりながら水晶を人差し指でつついた。ガラスを叩いたような音と、水が波を立てる音がわずかに鳴った。
と同時に、魔神の水晶にひびが入った。と思えばそのひびは十字

架を描くように広がり、水晶はスイカを割ったように四等分された。中に入っていた液体は空気に触れた瞬間即座に薄い膜を構成し、膜は次々と厚みを増してほんのり紅く染まり水晶の一部となっていく。生物の細胞再生を大きく拡大したようだ。

まるで生きているみたい。

その姿に心なしか感動していると、遮るように鬼灯が半月型の水晶をひとつ差し出した。

「これはお前が持っていろ。これがひとつあれば半径一メートルの範囲に誰も近寄れまい」

「あのさ、よくよく考えればそれって他のクラスメートもあたしに近寄れなくなるってことよね？　それってすっごく困るんだけど……」

手渡されて受け取っても、萌黄は渋った声しか返せない。

「心配は要らんぞ。それに弾き出されるのは魔界生まれの人間だけだ。現界の人間には何ら影響はない」

「そうなんだ、よかった」

「これから萌黄と紫苑、それに母さんに一つずつその水晶を持っていてもらう。あともう一つは、この家の玄関あたりに置いておく。誰か余計な人間が入り込まないようにな」

「お前はどうすんだよ」

エリザベスの光る瞳を鬼灯はしばらく眺めていた。白く長い毛を纏う彼女の顔を、耳を、手足を、尻尾を撫で回すように見ている。萌黄から見た鬼灯の目は、変態のそれではなくてただ単に全身の様子を見ているといったようだった。

「へ、変な目で見るんじゃねえよ、スケベ野郎」

「エリザベス」

「な、何だよ」

「お前あと私の魔力をどれくらい預かっている？　その様子だとまだ全部私に返していないだろう」

「……確かに、まだお前の魔力の四分の一はあたいが預かってるぜ。

返せってか？　言っとくけどまだ返す気はないぜ。いや、もうお前に返す気はねえよ。あたいは今の生活が一番性にあってるんだ」
「いや、構わん。輝く魔水から魔力を吸収しておいたからな、四分の一欠けたところで私の力は相違ない。だがその代わり、お前には重大な責務を果たしてもらう。これからしばらく……この家を頼むぞ」

第二十八話　始まりの予感（前書き）

遅れましたが、ＰＶ４５０００アクセス＆ユニーク９０００人突破です。
ご覧いただいた方、本当にありがとうございます。
作者の都合で一旦休止していたにも関わらず……（申し訳ないです）
これからも末永くよろしくお願いします。

第二十八話　始まりの予感

「父さん？」
「あたいに頼むだと？」
温度差の異なった二人の声が飛んだ。
「ああ。返事は求めんぞ。拒否はさせんからな」
軽く受け流した鬼灯は立ち上がり、タンスから分厚い黒のロングコートを持ってきた。躊躇いなく袖を通している。まさか外出でもする気なのだろうか。何も言えない萌黄の代わりに、テーブルの上に飛び乗っているエリザベスは舌打ちしている。
「偉そうな奴め。一体何企んでんだ？」
「勇者四人衆を捜し出してさっさと塵にしてくるだけだ」
まるで「八百屋さんまでおつかいに行ってきます」と言うように緊張感もなく言うものだから、萌黄はもちろん、エリザベスまでもが鬼灯の言う意味を理解できなかった。二人に構わず鬼灯はコートのボタンを留めている。ボタンのついた服を着るのは滅多にないせいか、掛け違いを二箇所も起こしている。
「ああ小賢しい、たかがボタンの分際で私に刃向かうなどいい度胸だ」
指先一本で鬼灯はボタンを粉々にし、その粉までも目には見えぬほど破壊してしまった。
確実に力が戻っている。
萌黄もエリザベスも、鬼灯本人も実感していた。
「この様子じゃ彼奴らを消すのに時間は掛からんな。捜すほうが骨が折れるかもしれん。どちらにせよ明日の朝になれば学校に来た奴らをひっ捕らえるつもりだが、母さんが動けない以上、事は早く動かしたほうがいい」
「お前が出て行ったほうが賢明だろうな。疫病神のお前が囮になって動いた方がよっぽどここが安全になるしよ」

「でも、もし父さんまで危険な目に遭ったら、あたしたち……」
エリザベスの無責任な言葉が逆に心の底を突いていた。鬼灯は昨日、重傷を負って帰ってきたのだ。棗のおかげで助かったとはいえ、もう彼女に頼ることはできない。そうなったら姉弟二人でこの絶望を乗り越えなければならなくなる。
何より、もうあんな姿を目にしたくはなかった。
自然と溢れてくる涙が、鬼灯の姿を霞めていく。
「萌黄」
震える肩に鬼灯の両手が乗った。表情はぼやけて見えない。
「なぜ泣く？　もしかして父さんが死ぬ姿でも想像したか？」
「だって……」
昨日の光景が何度も頭の中でフラッシュバックしている。それを取り払うように、鬼灯は萌黄の目元に流れた涙を拭った。震える唇を必死に堪えてみる。鬼灯は萌黄を強い眼差しで見ていた。堂々たる元魔王の風格がこんなときに感じられる。
「私は死なんぞ」
「父さん……」
「私はお前たちを残して死にはせん。私にはお前たちを守る義務があるのだぞ。魔界が取り返せぬ今は、お前たちこそが私の唯一の希望だ」
夢でも見ているのかしら。ううん、夢でも父さんがこんなこと言うなんて、ありえない。
胸があっという間に温度を増していく。乱れる鼓動が自分の耳に聞こえる。
父と目を合わせることができない。
「お、たまには父親らしいこと言うじゃねえか。教育は学校と教育係の仕事だって言っておきながら、お前もすっかり庶民になったな」
誉めているのやら貶しているのやら、エリザベスの声で萌黄は現実に返ってきた心地がした。
でも白猫が何と言おうと、萌黄にとって嬉しかったのは事実だっ

た。不安だったけれど、夕闇の向こうに鬼灯を見送った。隣の部屋のシェパードが力強く吠える中、萌黄の心はどうしようもできないほど高ぶっていた。

＊

「あ、萌ちゃん。昨日はどうしたの？」

教室に入るなり、リッちゃんは萌黄の元まで飛び込んできた。これが見ず知らずの変質者なら即座にぶっ飛ばして１１０番するのだが、相手はリッちゃんだ。他のクラスメートが妙な誤解をする前にリッちゃんを剥がして窓際の萌黄の机まで連れてきた。

リッちゃんを心配させたのは自分なのだ。席に着き、リッちゃんに説明を始めた。

「ちょっと家で色々あってさ。今、母さんと弟がダウンしてて大変なんだ」

「そうなんだ、大丈夫なの？」

「まあね。だから今日学校来たんだよ」

「お父さんは、元気？」

リッちゃんの目が輝いていることは見なくても口調で確信できる。

「今はちょっと出て行ってる。ある程度仕事が終わったら帰ってくると思うんだけど」

窓の向こうでは小雨が降り始めていた。どんよりした空気が町に圧し掛かっているように見える。確か天気予報では晴れるといっていたのに。傘を持ってきていない萌黄はますます気が重くなる。

嫌な予感がする。何かが始まるような。何かが終わるような。

首を何度も横に振って邪念を振り払った。

何を考えてるのよ萌黄。ばかばか。起きてもないこと考えても自分が辛くなるだけじゃない。

「萌ちゃん、萌ちゃん？」

リッちゃんの声がして、ふと我に戻った。やっぱりリッちゃんは

心配そうに口を尖らせている。萌黄は全部振り切って前の席にいるリッちゃんの丸眼鏡の奥を見つめた。
「ご、ごめん。ぼうっとしちゃって」
「え、萌ちゃん聞いてなかったの？　今、放送で呼ばれてたよ」
教室からはリッちゃんを援護するかのような冷たい視線が萌黄に注がれている。おまけにリッちゃんも早く行くように急かすものだから、誰になぜ呼び出されているのかなんて、萌黄には考える余裕がなかった。

第二十八話　始まりの予感（後書き）

感想の受付を再開いたしました。
返答のほうが遅れるかもしれませんが、よろしくお願いします。

第二十九話　戦士一族の失踪

呼び出された放送室の扉をノックしてみた。が、返事はない。
「あのー、誰かいませんか？」
太鼓がロックを奏でるがごとくノックを繰り返しても沈黙が返ってくるだけだ。いや、それよりも握り締めた拳が痛い。ドアノブを握って回してみても、ガチガチと金属に弾き返されるだけで扉は押しても引いても開かない。
ホームルームの開始を知らせるチャイムがスピーカーから流れている。
イタズラだ。それもたちの悪い。いや、たちが悪いなんていう言葉で済むものか。
さっさと踵を返し、廊下がひび割れそうな足音を響かせながら階段を上り始めた。よりによって放送室というものは一階にある。萌黄の在籍する三年クラスの教室は四階だ。具体的に言えば二十段の階段を六回も上らなければならないのだ。面倒だし、体力の浪費である。
皮肉に似たため息がこぼれ、二階に足を掛けたときだった。
「あ、いたいた紫苑様のお姉さま！」
三階から一つ飛ばしに階段を降りてきたのは、かのツインテール少女・金馬嬢子だった。
「呼び出してすいません、放送を掛けたのは私なんです」
躊躇いなくリッちゃんのごとく、萌黄の胸に飛び込もうとした彼女は見事に結界に弾き出された。吹き飛んだ彼女は上り階段に思いっきり腰をぶつけている。
「いたい……一体なんですかお姉さま！」
「あんたたちが襲ってこないように結界張ってるだけよ。近づいたらこうなるの。わかったらさっさと教室帰ってホームルーム受けてくる、わかった？」

魔神（メタリス）の水晶の効果を身をもって知った萌黄は勝ち誇って、嬢子の傍らを通り過ぎた。これなら勇者四人衆も怖くない。むしろ怖いのは、茶々（ささ）先生の遅刻指導と、リッちゃんの心配顔だ。

三階に上っても嬢子は追いかけてこない。魔神の水晶に恐れを為してくれたのならそれは嬉しいことだ。リズムよくステップを上っていた萌黄は、四階に仁王立ちする少年の姿を目にしてしまった。

「はろー、魔王女ちゃん」

松陵圭太だった。まったく今日はついていない日だ。どうして平穏な日常の邪魔ばかりするのか。思いながらも萌黄は無視して階段を上りきった。こちらには魔神の水晶があるのだ。強行突破なんて軽いものだ。

「無視？　でも一つだけ聞かせてくれへん？」

後ろからついてくるのはわかるが、萌黄は興味もなく三年一組の看板目指し歩くだけだ。

「千臣の失踪――知ってるか？」

「あんたたちが知らないことなんて、あたし知らないわよ」

「じゃあ、魔王は今どこに居る？　今回の奴の失踪と関係ないんか！？」

荒らげた松陵の声が突然遠くに消えた。後ろの足音も同時にぱたりと消えた。

「知らないって、言ってるでしょ」

萌黄は半分だけ後ろを顧みただけで、茶々先生の点呼が響く三年一組へ飛び込んだ。

＊

「おかえり萌黄」

自宅へ帰った萌黄に掛かったのは、紫苑の声だった。リビングに入ると、彼はヒーロー特撮「正義の星スタートリガー」の再放送に見入っていた。まるで今日の朝まで寝込んでいたとは思えないほど、

普段と様子は変わらなかった。
「もう、大丈夫なの？」
通学鞄を床に置き、萌黄は弟の隣に座った。エンディングが流れるテレビを黙らせた紫苑は、今にも泣き出しそうな萌黄を見るなり大袈裟に笑いだした。
「大丈夫だって、ただ疲れてただけなんだから。そんな心配しなくたって平気」
「そっか……よかった」
「話はエリザベスから聞いたよ。これを持っておけばいいんだよね」
紫苑の手には四分の一に割られた一つ、半月型の魔神の水晶が乗っている。この効果は確かだった。嬢子も松陵も為すすべもなく吹き飛んでいったのだ。手のひらに乗るほどの大きさながら、威力はかなりのものだった。
そう言えば、松陵は千臣が失踪したと言っていた。どうでもいい、むしろ嬉しい話ではあるが、あのときの松陵の切羽詰った声が脳裏を掠める。嬢子も突然敵である萌黄の胸に飛び込もうとしてきた。二人とも押さえ込もうとしていたようだったが、あふれ出た感情は魔王である鬼灯を前にしたときよりも混乱していた。
失踪。
もしかしたら父さんが、千臣の身体を完全に破壊したのかもしれない。
「父さんは帰ってきた？」
「帰ってきたよ。三十分ぐらい前だったかな」
「そう。今はどこ行ったの？」
「買い物。腹が減っては戦はできぬとか言って、近所のスーパーまで行った」
「ふうん、それで何か言ってなかった？」
「それがまだ何の進展もないんだってさ。だから明日学校で待ち伏せでもやってみようかとか言うんだ。そんなことしたら一般人も巻き込んじゃって、この世界からも追放されちゃうって言ってるのに

聞かなくてさ――」
紫苑の愚痴は耳から耳へと通り過ぎていった。
じゃあ父さんと、千臣の失踪には関係がないってことだ。それはいいことなのか、悪いことなのか。
汚れたキッチンから、滴るしずくの音が虚しく響いている。

第三十話　彼の望んだこと（前書き）

今回は前半は萌黄、後半は嬢子サイドの話です。

第三十話　彼の望んだこと

鬼灯が帰ってきてからも萌黄の心にはまだ靄が掛かっているようだった。

目の前に並べられた三十円引きのサンドイッチやおにぎり。母さんが目覚めていないから、ありふれた日常とまでは言わなくても、今までに似た生活が今蘇っている。しばらくの間勇者四人衆の襲撃が続いたが、魔神の水晶を手に入れてからというもの、それも一切ない。

でも、なぜだか、萌黄にはこの空間がいつもと違う気がした。

いつもと違う空気。

「どうした萌黄、全然減ってないぞ。食欲ないのか？」

鮭のおにぎりにかぶりついていた鬼灯が、突然萌黄に声をかけた。不意だったが、萌黄は取り繕ってタマゴサンドに手を伸ばした。

「ううん。なんでもない」

「萌黄がそんなのじゃ困るよ。エリザベスも外に出かけちゃったし、元気出してもらわないとさ」

つまらなそうに口を尖らせる紫苑が妙に憎らしくて、萌黄は逆に馬鹿らしくなってタマゴサンドにかぶりついた。柔らかい食感が口の中いっぱいに広がる。コンビニの味も捨てたものじゃないな、なんて思いながら次はツナサンドに手を伸ばす。

おにぎりを食べ終えた鬼灯はテレビのスイッチを入れている。夕方のワイドショーのようだ。司会者の甲高い声がテレビ越しなのにギンギン喧しく届く。

『どう思いますか、この残虐極まりない事件について！？』

カメラに迫っているのだろうか、テレビ画面いっぱいに司会者のアップが映し出されている。つぶらな眼差し、太い眉毛、太い口髭。定年近い親父のアップが全国のお茶の間に映っているのだと思うと、

日本国もどうかしていると思ってしまう。
「父さん、番組変えてよね。こんなの見ながらの食事なんて気分悪い」
「萌黄に賛成」
子どもたち二人がいら立ちのピークを迎える中、鬼灯はテレビに見入っていた。もう司会者は撤退して事件の情報が映るスクリーンの横に立ち、コメント交じりに説明している。
『――被害者は中学三年生、受験じゃないですか。そんな彼の胴体に何かが突き刺さったような直径三センチの穴が開けられていたというのですよ。痛々しい。彼は未だ意識不明の重体だといいます。えー、現場は人通りの少ない高架下で、事件の推定時刻は午前二時前後だったというのですが、コメンテーターの方々いかが思いますか！？』
「あれ？」
みっともないアップが消えヘリコプターからの画像に切り替わり、萌黄は紫苑とともに食事の手を止めた。中心に映っているのはもしかしなくても萌黄たちが通う白樹園中学ではないか。さらにカメラが変わり、学校の校門で中継している画像に変わった。こそこそと帰る学生たちがリポーターの背後をすり抜けていく。
『被害者の学校周辺に来ています。学生たちは先ほど入ったニュースに驚きを隠せない様子で――』
「この学校の生徒が事件に遭ったんだ、しかも萌黄の同学年」
頭の中が真っ白になった気がした。朝、嬢子と松陵が血相を変えて迫ってきたのを思い出した。あの時千臣が行方不明だと言っていた。そして事件は昨日の夜起きた。今日の学校で欠席していたのは他にもいたかもしれないが、その中に千臣が紛れ込んでいることは事実だ。
あの彼がまさか、事件に遭った？
じゃあその事件の首謀者って。萌黄の視線は自然と鬼灯に向かっていた。鬼灯は次のニュース――振り込め詐欺の手口を説明してい

る――を見ている。
「父さん、あの千臣には昨日、会えなかったんだよね？」
「急になんだ、会えていたらさっさと始末していたが、会えなかったから困っているのだ。しかも事件が起きたとなると面倒だ。あの様子では保護者といえども簡単に学校に近寄れんではないか。不審者扱いされるのが目に見えている」
父はテレビを見たまま背で会話している。
「そうだよね」
もう一度ツナサンドにかぶりついた。味はまったくしなかった。

＊

「篤志君が瀕死って本当なの……？」
金馬嬢子が白樹園総合病院に飛び込んだのは、夕方の速報ニュースで見て間もなくのことだった。すでに千臣篤志の隔離病室の前には他の勇者四人衆の仲間たち――松陵圭太と都束輝が立っていた。二人の表情は笑顔を完全に切り裂かれたような顔をしていた。いつも嬢子を茶化す二人の様子はなかった。
「嬢子、来たんか」
松陵が裂かれた笑顔を少しだけ取り繕って、足を止めた嬢子の背を叩いた。
「篤志君は無事なんだよね？」
「無事、らしいけどこの雲行きは決してよいとは言えん」
「どういうこと、圭太君の神様のお告げ、悪い結果が出たの？」
「いや、今俺の頭が冷めへんせいで神様のお告げが聞こえへんのや。緊急手術は成功したらしいけど、まだどっちに転んでもおかしくない状況や」
「――魔王に襲われたんだよね？」
「本人から聞いてみんとわからんけど、そうやろな。千臣が並の人間にやられるとは思われへん」

分厚い扉に阻まれた向こうで何が行われているのかはわからない。嬢子は祈るようにして胸の前で指を組み、瞳を閉じた。真っ暗な世界がその向こうに見えた。

「ねえ、嬢子」

ずっと口を閉ざしていた輝がこもった声を出した。

「もし、もしよ。千臣君が死んじゃったら、戦士一族はどうなるの？　もう戦士一族の血を継ぐ者はいない、鬼の紅剣を扱う人間もいなくなる。私たちだけじゃ、魔王に勝てるとは思えないわ――」

「黙ってよ！」

「黙ってられないわよ。私たち今まで魔王を追い詰めてきた。でもまだあの血は足りない。輝く魔水がなければ完全な勝利とは言えないのよ」

「そんなのはわかってるよ」

「今まであんたたち真剣みがなさ過ぎたの。だから千臣君がこんなことになってしまったの」

「あんたたちって、輝こそ全然現界に来なかったじゃない、偉そうなこと言わないでよ！」

「ってかあれだけ近づいておいて何？　何が紫苑様よ。何がお姉さまよ。全部知ってんのよ、あんたのふざけた態度」

「うるさい！」

「うるさかろうがそうでしょ。稲妻紫苑は次期魔王候補とも言われた元魔王子。大統領の娘であるあんたが見逃してどうすんの？　そのせいで真剣にやってた千臣君がもし殺されてしまったら、彼、可哀そうだよ。何の復讐も果たせずに呆気なく殺されるなんて、そんなことあっては駄目。私は千臣君の、望んだ復讐をやり遂げさせてあげたい。千臣君の手であの魔王鬼灯の命を絶たせてあげたいの」

唇をかみしめただけで嬢子の口から反論が漏れることはなかった。輝の言うことは正しいのだ。

隔離病棟に沈黙が流れた。どこかの時計の秒針の音が響いている。

もう後戻りできないよ。

ごめんなさい、紫苑様。嬢子は、魔女一族として、大統領の娘として、そして篤志君の仲間として、あなたたちに復讐を果たさなければなりません。

できればどうか、恨まないでください。嬢子はあなたのことがずっと大好きです。

「――篤志君のために、魔王は殺さない。でも他の三人に対してはもう、容赦しない。行くよ、圭太君、輝」

廊下に反響する足音が聞こえているかいないのか。

閉じられた部屋の中から千臣の声がわずか、聞こえたような気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4316o/

我が家は魔王一家

2011年11月7日12時02分発行